
しばらく

遊佐ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しばらく

【Nコード】

N47910

【作者名】

遊佐ひろみ

【あらすじ】

“ 怨むものの怨みて縦^{ほしいま}まなるを奈^{いか}何にせん ”

我々は心より人を怨まざるを得ない時、どうすれば良いか。

一冊の古書との出会いにより、『私』は怨みの世界へ引き込まれてゆく。

序章

北方の長いゴルジュを抜けると湖沼風景であった。美しい霧の大群であった。月の水がほうつと浮かんだ。

すさまじい静けさである。明海あかるみといつて、ただ落ちた銀のひとすじが燦爛ひびきするのみで、夜なのであろう。それにこの煌かがき。ほとりに膝をついて、てのひらで水を掬うと、どの玉も純銀である。また、さらさらした水である。青く灼けた銀河のうつり矩くま合も、くるくると美事に星を回している。ちよつと美しい。浅瀬に銀水を吸いあげる万々の花しようぶも、桃のうす皮のような花瓣ふくいくを馥郁ふくいくと咲かせている。赤らんだり、黄ばんだり、もみじの下枝から、と低く舞う鮮麗あさなのさえ物ありそうなお。。

ガラガラした岩の跫音あしおとが響く。その外は、高い峰のことだから虫の音もない。そのくせ、白々した白樺しじかばから、若葉の突き出た匂いが押さえられない。肉の厚い葉に詰まった胸にむせる匂い。冬の水っぽい匂い。高原の湿れて乾いた羊歯やまぶきや山路やまみちやハツ手の匂い。そのどれにも肌をこする鮮烈がある。が、それらに音はない。コートのポケットに両手をつつこんだまま、ほとりの上に高く背をのばせば、青い水あかりがひんやり目の底を蔽う。玻璃杯コップいっぱいサファイアの水に音もなかるう。しかしそれを幾億杯ともなれば、青宝玉石サファイアを打ったように、高い響きのまま木霊こだまする。ないといえはなさそうな、静けさに目を閉じて、てのひらを水の中へひたしていると、心の中へ青く灼けた線わすが浮いてくる。それが鋭敏な金属のように、高い波を打つ。ほんの幽わすかでも、ちよつと抜けてしまえば、水銀色にはじけて粉々となる。たいていは感情もあつて、むぎむぎ破壊してしまう。心が、鏡をみがいたようにはつきり澄むということが、日常を生きる我々にとって無理らしい。そうあつたら、思い生きながらも、影人形を使う環境の複雑さが、我々を自由にしない。内証ないしじょうがわるい。そりが合わない。身の振りが不安だ。とうてい冷たく澄みきった水の音にな

ぞ耳は向かない。

こと私の場合にいたっては、それが怨みによるものでないともいえまい。有髪うっぱつの尼の念仏を聞いても、日曜キリストの基督を胸にきつても、薬餌かじきりゅう、呪まじきりゅう、加持祈祷等々、屋根瓦にへばりついていて猫の糞みょうばんと明礬めいばんを煎じて飲んだところで、心の上澄こそ日に透けた感謝になるものの、腹の底から払いきれるものは何もない、虔つしんでいるつもりでも、溶鉢炉から出る銅汁のように、どろどろと脳が流れて、感情になる自分を捨てたものへ、自分を追いやったものへ、報復の狼煙のろしを焚たきげる。それらはどこにもいて、ちよつと朱塗の碗から小豆のいい匂いを嗅ぐだけで、一腔えんたくの怨毒えんどくをいずれかに向かつて吐き散らす。このような経験は誰にでもあるかも知れない。誰もがきつとひとを怨むかも知れない。愛しい人間に左右の暇なく捨てられて、怨むかも知れない。親しい人間に？姉妹をあさられて、怨むかも知れない。人情にそむいて、義理を欠いて、金のために、死の無言がために、親兄弟と離縁して、捨小舟になろうとも、知れないものだ。怨まな*い*までも、怨めしい気が心をかき乱すかも知れない。

そのとき、我々はあけられんと澄ましていられようか。平気な面あでやかんの白湯を茶碗に汲取くっていられようか。脈を送り血にぬらした心がさくつと裂けて、声にならぬ悲鳴に変えるのではなからうか。まや薬を塗った傷口のようにいつまでも膿み、じくじくした古傷と残あつてしまわないか。

いま一冊の古畫こゑがある。

百年まえの墨を手書きに綴とつた、名も知られぬ民話を記したものである。保存のほどは無名に齊としく悪い。真宗しんしゅうに附属する古刹こせきに見るのとちがう。おおかた火鉢にこげた部分もあれば、鼠が失敬した痕もある。これがどの手を渡わつて家の暗い樓梯はしだんから落ちたかは、わからない。ずいぶん永い間、埃かみひょうくと紙表具の軸との間に眠あっていたようで、来客の際に降あつて出た。ひよいとつまんでふたりで眺めると、悲しいほど武骨な筆跡はなるほど骨董品だった。鑑定という鑑定ではないが、筆の使いがちよつと美しい。が、禿かげている。なんとも

扱いが扱いであったから、霜枯しもがれしたような油いろに染ついている。これでは博識な文学者が欠硯かけすずりに腕をふるつたにせよ、哀れにほかならない。国宝ですらよほど興味のもたぬ知人は、ぷいと話頭を転じて湯飲を空にした。さつさと帽子をかぶった。

その後、夕照にひとりになって、黴くさい中身をはぐつた。古い扇にある能筆のうひつが、柳の縮れ葉のように混んで、未熟な小生はうんうんいつて解説に迫られた。文脈が明らかになりかけると虫が喰う。虫が喰わない所は筆が禿げる。から、骨が折れた。しかし興味は削がれることなく、かえって声に涙がまじるくらいであった。

怨みである。

古畫にあるは深い怨みばかりであった。人様を怨まずにいられぬ思いに体が割れるような苦痛を味わっていた私は、頭の中に火の走るのを見た。

怨むものの怨みて縦ほしまなるを奈何いかにせん。

冒頭から、肉の眼で恐ろしい夢を見るような思いであった。怨みというものの、あまつさえ本気にならぬでいた私の心を、誘い、惑わす、すする寒き言葉であった。ひとの血をしばらく、つぶし、したたるうちに紙面へ流したかと思ちがえるほど、すさまじい筆圧と書体で民話はそれからそれへと綴られる。

これを語らんに人なく、しかも自ら拯すくうべき道はありや。ありとも覚え、なしとは知れど、煩わづうものの煩い、強あながちに怨むる心を避けず、深かりけむ。

(中略)

車は駛はせ、景は移り、境は転じ、客は改まれど、易かわらざるその憂鬱を抱きて、寧ろ怪き誘いのごとく成りなを、快からずやと疑えるなり。

このあと、怨むものは天川屋という逆旅の枕にすすり泣きをする。

峰たかく、岩深き中にぞ、囲われて、日も山峡に動かし、いよいよ石の玉垣、夜の色と、おもしろかるべきことなりければ、沈むなりけり。

(中略)

かかる晩のとき、亥の上刻なれば、よろづに軒の下、仕舞う声、白壁建ちつづく、土蔵造りにこだまするままに、酒息のむつまじき四五人ばかり、怨みじゃこう、いと忍びて、熾んなりけり。すすり泣きすものの心、躬らつりこまんと、怨み。怨み。鼻涙をうちかみつつ、驚き騒ぎて、?りながら敷居際へ、はかなき花、はい寄らんと、いとあはれなり。

窓の外から聞こえた男たちの話とは、次のとおりである。ちよつと訳してみよう。

「こりやあ参ったねえ。お前さんがいう、その私怨ヶ池というところへ行きさえすれば、誰の怨みでも、エ、立ちどころに晴らされるのかねえ?」

「へエ。これは確かな事實にございます。じつさいに怨みを晴らしてもらったという、泉?の男があるそうで、ずいぶん気前のいい話をふる舞っております」

「すると、そこに棲むという化坊主は不思議なことに、おれの怨みでさえ、立ちどころに晴らせるわけだな。エ」

「立ちどころ……へエ。晴らせるには晴らせましようが、そこはさすがの仙人の端巾、ただ、というわけにはまいりません」

「おおおお、糞坊主めツ! この次にや金でもねだるうか」

「イエイエ。金なぞ一文も?びません。私がいうのは、そうですな、化坊主は高い山にある池の、さらに広い中央にのみ居ることから、その沖合?合まで池の水を泳いで参らねばならないと、そういうこ

とにございます」

「合点合点。いち早く、どれ、きょうの日の出には、手近な衆に小舟を担がせよう」

「ヲヤツ！ これはいけません。あの池の底へ竹竿たけざおなぞつこうものなら、化坊主は疎かおろ、五葉の松をおつ立てた小岩のすみかさえ、見つかからないそうなんでございます」

「なんで」

「へエ。畢竟じつまいでございます。昔日むかしのことでもございましたでしょう、おおかた江戸で白河楽翁しらかわがくおんが政柄を執っていた、寛政かんせいのころでもございましょうか。駿すんもつ？より或る城持大名が、じやらくらと行ってどやくやと遙々私怨ケ池くんたりまで行列を従えまして、まあどこでどう小耳に挟んだものでしょう、底は一枚板の平らかな小舩で、盛んに池の水面を蔽いますれば艸くさの根をわけるくらいにして化坊主をつらまえ始めたのでございます。おおかた家老あたりが生半なまなかにぬすみ聞きしたあれの不思議の術を、すっかり鶺鴒せいらにしたのでございましょう。さんざ家来を池の水へ放つて、昼はひねもす夜はよもすがら、土を浚うじえるだけ浚うと、嚏くそめを吹かして帰っていったのでございませす」

「ヤレヤレ。とんだ酔狂もあつたもんだな、エ。小舟がむだともなれば、いつそ水底の日の透るうちに済まそうかしら」

「イエイエ。池も黯く？なくなつては、まるで同様にございます。化坊主は、皓々と月の晩にのみ、その影法師を織しまい波へ揺すっているのでもございます。」

昔日むかしのことでもございましたでしょう、あれは元慶げんけいの末か、仁和にんなのはじめか、平安朝の摂政藤原基経もとねに仕えている侍の四人が

「……………」

だれの怨みでも晴らせるという化坊主、その存在を耳にした怨むものは、血にぬれた自らの怨みをもと、いざ、活路を見いだすのである。

ひまわり、あまのこ、あまのこ。

怨むものの怨みては、沾しつえる目をあげにあげ、はるけき梢にかか
る、乱雲を芟かるとがまの月をばにらみあげる。

荷をくくり、酒をあおり、くらやみを排斥おしのけて、戸面とへのめり来
れば、私怨しつケ池、私怨しつケ池、くちうちを嚙さびつつ、やぶからやぶか
ら九折じゅうせつの蔦つたのかずらを頼たのみにあぶない山道みやちを、いく日も、いく日も、
何丈なにぢやうみあぐる屏風びやうぶ巖いわを相手あひまどり、はらはら横よこ様の松まつのあやうく立ち
すくむ、そのかみの路ぢなき懸崖けんがいを、女人にょにんのあしで乗りきつた。

さて、私怨しつケ池の月はゆれる。

風の落ちた、いちめん水銀すいぎんいろのみのみに、燦爛さんらんとひとすじの水
沫なわがあとに残れば、はたして広い池の中央ちゆうじやうに、目の覚めるほど？ねじ
けた五葉ごえつの松まつが、いつか夜の水へつき出して、堂々どうどうと柯えだを張はつてい
る。

青苔あおいけの汚けく生おえそろつた小岩せうがんが、篋のび太たいい根上こんじやうにからまれて、たぶ
たぶと半畳はんじやうの水みづをおしのけて、おしよせられて、澡あられる。

いままで浮木うきぎ芥かの流れぬ水のうえ、？まをすつては一心いっしんに、これ名
譽よな景色けいしきとあおぎ、ひた目を瞳まる。

小岩せうがんには影法師かげぼうしが見える。

なんでも鐵拐てつかん仙人せんじんみたいな襪は褌ふんどしを着た、丈六じやうろくにくんだ坊ぼくさんで、
長羅ながら宇うのキセルをぶかぶか吹かせては、しみじみ月見つきみをやる。

女にょは池いけのなか、坊ぼくさんは岩いわのうえ、隔へだてるは五間ごかんの水みづ。

もし、と女にょは倏忽しゅつごつにいう。

坊ぼくさんは聾ぶんか、へいきでキセルから煙けむりを吸すっている。

女にょがまた、もし、という。

その拍子ぱしに、水底みずそこのあしをすへにらしたで、仰の様さまに沈しみかかつて、が
ぶりとやる。

とろとろの汐木しほぎくさい水の味あじに、あなたまらじと白目しろめをやる。
すると坊ぼくさんからから笑わらう。

めはつぶれて穢きたなくにごり、歯がいつぽんだけ黄帯きはんでいる。

「予よのしようべんを呑んだな」

ふとい柯えだへぶら下げたひょうたんを把持もつと、ぐいツと一つ啣ふくむ。その酒のぐあい、鴈瘡がんかさの毛無猿むざるのようなからだ、月あかりに負けじとなかなか赤くなっている。

そのうえ興おもしろいことといったら、つるつるてんの禿げ頭から、むわむわ子ほし子ふり形なりのゆげを恣風まつかぜにのぼらせて、

「予せんじくは先刻、そこいらへ立ちしようべんをした。かぜに乗ったから、遠くまで響きこいてな。

なに、予だけではない。小鹿のむれも月に誘われたで、短く鳴くようにやっておる。

野猪のはいかん。いかんいかん。山から顔を出したかと思えば、さつそくほかの群を追い回すか、ごうごう鼻を詰しまらせて、便べんといつたら大も小もない。はてひよっこ、小便の味とは奈何いかなるものか」坊さんは烟けむをわに吹くこと五六ぶく、どこかあてなしに睨にらむふうふうに目を据たえるから、女は屋樓海しんろうかい市しに立たされたようなもの。

「もしもし。あなたさまはひとの怨みを晴はらすという、偉大なお坊さまにございますか。ああ、きつとそうでございますよう」

月夜に立てる一すじの煙は、えだ越しに女を瞰みお下さろしつ、おのずから乱れん。

「もし。お坊さまがどんな仙術えんじゆつやら、厭術えんじゆつやらをおやりかは存じませんが、こんな小岩へ千年も、二千年も、浮かんでおられるからには、さぞ人智のおよばぬ仙人業せんじんごうに相違さむございます。

そこでどうか、わたくしめの願いを聞いて下さいませんか」
てのひらを祈るように合わせると、坊さんの方ではまたひょうた
んをやる。

そのうちになにやらを曰いうのかと待ち構えれば、やはりなにやらを曰いう。

「いかにも。予はひとの怨みを晴らす坊主にある。

千年も二千年も、はるか昔より、それこそ爰こゝのまだ水がたまらぬ

うちから、予はこうして月をあいてに酒をあおる。

酒をあおるついでにひとの怨みも晴らしてあげる。

予のうわさはいつの世も絶えることのないか、月の晩になりさえすれば、ぼつらぼつら苦しませの顔に水を切つて、さあ晴らせすぐ晴らせと、男も女も水しぶきを上げる。

おいひよっこ。きさまもそうであるう

「さようにございます。ぜひとも、このわたくしめのふかい怨みを晴らしてあげて下さいまし」

にねんなく鶺鴒たねす立むにんげんを龕末そまつに見すえ、きさまの怨みを晴らしてあげないこともないのだが、と梢にかかるけむの糸いとを、つと乱す。

「しかし聞くがいい。きさまのように甘たれたひよっこは、いくらでもある。

怨み、怨みと血眼をひんむいて、ほどよくわめいておつても、しよせんは虹蜂あひはちに鼻づらを見舞われたていど、そっくり針むしの筵しんへ落ちたくらいな喚きをやる。

予がちよつと恐い顔で威嚇おどかせば、さあそでを匆いそがわしく曳きうごかし、追いつくものはなにもない。これでは、予も怨みの晴らしぞんというものが。

そこでコレひよっこ。きさまが、いいえ私の怨みはそのような御お巫山戯ふざけでなく、まして鳥渡ちよつこや鼠渡ねずこのおどかしにも引き下るものがない、というならば、それ相応のかくごを見せてもらうが、よいか」「はい。怨みを晴らすのに必要とあらば、いくらでもお見せ致しますよう。

けれども、私はいったい、なにをどのように致したらよろこびませうか

なんとか蚊とかいう代りに、ながらうのキセルを袂たもとへしまい、ぼろを撈かきさくり、かわって取りいだす木のはしを、ひよいと闇雲くもに抛ほうれば、とぷりとそう遠くない月が輪をなげて乱れる。

「どのようにしたらよいかだと？」

「ほづ、どのようにか出来るものならば、まあ、やってみるがよい」
言のいと呑みこめず、まして、怨むものは擲却られたあたりを
しげじげ見つめている。

そのうちに、平骨のおうぎくらいにしかなかった木のはしの透影
が、いよいよ池のみずに咫をたくわえ、また、それがどういうわけ
だかのぶとい蛇みたいに、はらで水をきって、ぐるぐるあたりかま
わず遊び始める。

「お坊さま、これはいったい、なにをお投げになったのでございま
しょう。なるほど、これも、こうしような仙術の一つにございま
すか」

坊さんはしずかに目を閉じている。

そうこうするうちにも水面をきって、四斗樽ほどの白蛇が一ぴき、
ほのおのような舌を隠見かせながら、みるみる飢食をねらい澄すか
と思えば、池をもり上げ、みずばしらを立てて、あたまから女をに
らみ下ろす。

「おいひよっこ。逃げるなら今よりないと思え。もしも空腹のあま
り、こいつががぶりといったならば、それはひとのみにことたりる。
そうなつてはいくら予の術を以てしても、術なしだ。よいか。き
さまなぞ、この白蛇にかかつては丸呑におわつて、あけ方には瑩や
かな骨ばかりになるのだぞ」

怨むものは、口のはしを耳のうらまで裂き、小刀ほどの大牙をず
らりと並べる、横紙やぶりの大蛇にのし掛かれて、ぶるぶる胴震
のはげしさに、悲しい声もあげられず。

「さあ喰れるぞ。喰れたくなくば、さっさと帰るがいい。さもなく
ば、きさまはいまに丸呑ぞ」

二竜の長鯨を巻くように、水たぎらせる蜷局の、いちめん泡となる底に、怨むものは後脳をつかんでこわごと、帰りません、怨みを晴らせぬうちは、帰る場所もございませんと、命をおびやかされた人間とはあべこべな言葉をほき捨てる。

「この口強馬め。さつさと帰らねば、きさまはついに丸呑だというのが、ちつとは判らぬか。命あつてのひとの怨み、きさまが死んでしもては晴らす怨みもあるまいに！」

蜿蜒いぶ厚い白蛇のそり身が、くるくるとぬれた鱗を左右へ送りながら、究竟に女の一つこそでを逆捺にしぼるほど、いよいよ蜷局のゆるみを絞りつける。

怨むものは、みずからの死をいっさい覚悟して、奥歯を嚙切り、皺顔につよく眼をねぶると、

「この怨みが晴らされなければ、私の命なぞあつてないも同じこと。どうか、おおおお、お坊さま。お願いでございます。私が白蛇に丸呑されたのち、この身に染みついた怨みだけでも、どうぞ晴らして下さいまし。そうして下さいまし」

須臾の間、女はいまに喰れるか、さあもう喰れて大胃ぶくろの底かと、辛抱の上でのひらで皺面を掩っていると、あたりは恣風のおるばかりに蕭然となつて、大蛇のきる逆波の息苦楚もない。

ひよつとして、と断念目を開け放てば、池はもとの月を載せている。蛇も白蛇も、化けて出そうなものはない。ただ、一ペんの木の端が、あごの下あたりを沈みかけながら、うつらうつらとひょうきんに身をゆらす。

「コレひよつこ。きさまのようにあの白蛇のやぶ睨みから一步も斥かぬものは、ここ数年おらんかった。世の人間は皆てまえの命が惜しいでな。それにつけても、このひよつこはだいぶ見込みがある。さあさあ。きさまが晴らしたいという、身に染みついた怨みとやら

を、予にそつくり話して聞かすがいい」

坊さんは把持もつていた瓢箪ひょうたんをぐいぐいのみ干すなり、松の根方へ立て掛けてあつた、瘤こぶと節ふしだらけの杖つえをひよいと月に透かし、かざしして、どさんと重たそうにひざへ渡す。

この振る舞いを見込んだ怨むもの、雀躍こわとりして嬉しいがい、つらつらおのれの怨みを足搔あがき、手もぎ、血をかんで語りはじめる。

それは、駒下駄こまくだから絶えずはねのあがる蕭々雨しゅうしゅうあめの晩のこと。

一本の酒に夫婦がまっ赤になつて打つ真似まねなぞしているところへ、罰利生ばちりじやうと名乗る大男の押入おしりりによつて、女はまだ息のあるおつとの眼のまえで、さんざいたずらをされたというもの。

罰利生とは、二十ばかりの、醜い隻眼かための男で、先年陸奥むちのくの戦いに餓えて人肉を食つて以来、鹿の生角いみづのさえ裂くようになったほどの強力りきりの持ち主。いくら亭主が那須野出の騎射きしやの術うに長ちやうがあるうとも、箆へびより征矢せいやを抜く暇なく、また、酒の入つた腕が伸びきらないうちえいひに、ああら脾肚ひはらを一突きに屠ほられたか、ひとあし先にくびへし折られた下女げじよの上へ、どさんと打ち捨てられたのである。

生き残つたは女のからだばかりで、おつとを立てる手まえ、すかさず小刀ささをのどに突き立てて、もっぱら羽交い締めはやにされたり、山に隠れた悒鬱うつな池へ身を投げ入れて、またいい加減かたなくあいだ網あに掛かつたり、思いつく限りの身始末みしまつをこころみたが、無念あが仇あとなつては死に切れず、かといえ讎かたきはあの悪名あくなたかき罰利生。のちになればなるほど、天下に聞こえるどうあくの盗人ぬすびとで、火つけをする、人殺をする、十四五人の同胞どうぼうらと葛城山の麓ふもとのよこ穴あなをねぐらとする、左兵衛府さへいゑふの下人げにんですら矢鱈やたらに近づかぬ野郎や郎にあらば、とても女の出る幕はない。

とうとう晴らせぬ怨みを抱きつつ、死に場を求め、北を南へ、東を西へ、しまいに天川屋の夜具すずしなに獻な款まと、あの酒息さけいきに誑かたらう男おとこらの声こゑに耳をおどらせたのである。

怨むものは一簣いっさいに怨みを語り終える。そして是非ともこの怨みを晴らして呉ゆるれろと息はずませる。

弥いよ坊ぼくさんもその気になつて、罰利生ばつりせいという男を殺せばいいのだな、と蛙股かえるまたの杖を大きく振りかざす。

が、こうなつては妙なもの、あれほど怨色えんしよくみなぎらせていたのが、いけません、これが罰利生を殺してはいけません、などと坊さんの杖へ掴みかかる。

「コレひよつこ。きさまは予に、是非ともどうして欲しいというのか」

「はい。確かにお坊さまには、きつと誰かを呪い殺して頂きたいのでございますが、それはにつくき罰利生ではなく、罰利生の妹の沙金しゃきんにございます！」

いうところには、自分はただの一度も見たことがないが、骨に徹こたえるほど憎きものには、ゆいいつ妹がいるらしい。

しかも顔さえろくろく覚えないうちに両親ふたおやを歿なくしたため、あの瘴どろ悪あくにして瘴猛じょうもうの鬼が、この妹をまるできちがいみたいに可愛がつて、挿頭かかしの花、衣きぬのうらの玉と、なで愛いとんでいるらしい。

いっぽう妹の沙金とは、いたつて気のやさしい、兄おもいの生娘きむすめだが、罰利生の寵愛態ちやうあいぶりにはなにぶん手を焼くこともあるらしく、なにしろ着るものやら、髪飾かみどしやらというと、紫むらさきの袿かきとか、紅くわいの袴はかまとか、すっかり凡人には手の届かぬ上品を山のように簞たからえさせ、その綺羅いきらびやかなの堆うすたかのうちへ妹を沈めてしまえば、あとは不思議そうな眉まゆを浮かべた沙金の顔ばかりが、終日宝たからの山からのぞいているらしいのである。

「今となつては、わたくしのこの想いもただ罰利生の死に顔を拝むだけでは晴らすに晴らされず、それどころか、かえつてあの男を他界へ逃す心地にあるものでございますから、その生死いきしににつきましては、ようよう自然にお委まかせ致しましても、せひ、生きながらの窺しのみだけは、わたくしの大切なひとを剥奪はうわれたごとくに、罰利生からも掛けがえのない沙金を奪い取つて、私と同様の艱苦かんくを、なお、ぞんぶんに味あわせたいのでございます」

「ほう。きさまはそれでよいのだな」

「はい。もちろん、わたくしと罰利生の妹の沙金とは、逢ったことすらなければ、ただ他人伝にのみ、その心像をしまったに過ぎず、なにもこれといって当人に怨みもございませんが、そこは大悪党の妹に産声をあげたが運の尽きにございますゆえ、秋毫も無理なぞはございません」

「よしわかった。ではさっそくその沙金という小娘のもとへ、血に飢えきつた咒の黒竜を放つとしよう。　　が、ただし」

「ただし、なんでございましょう」

目を眇にして、怨むものの顔を、怨むものの心を、しげじけ見透すように、

「ただし、おのれの私怨を晴らすためだけに、おのれの復讐心をより能く満たすためだけに、なんら罪をもたぬ小娘の命を奪ってしまつたことを後悔して、一滴でも、ほんの一しずつでも、その大きなまなこから、はらはらと、零してはなるまいぞ」

「後悔ッ！」

怨むものは頓狂声のあと、眼を逆さに吊り上げながら、呵呵とくびをねじ曲げて晒う。

「はてさてお坊さま。劬勞してようやく晴らされるといふ怨みを、いったいどの国の莫迦が涙して後悔いたしましたしょう？　わたくしははなから盗られたものを盗り返すつもりになって、巖をつかんで参つたのです。もしわたくしが、うかつなことをするというならば、それはとんぼ返つた後の嬉し泣き以外にはございません」

黙つて聞いていた坊さんの、莞爾ともなかつた面の皮が一変、いつか坐寒きほどまでに不気味なえみを浮べて、

「よいか。如何なることがあるうとも、決して、後悔に暮れて、はらはらと、涕涙いでなるまいぞ。よいか。絶対に、ぞ。

まんいち、もしもきさまが万々にでもこれを破るうものならば、そのあやうい一しずつが、見る見るうちに　　、なに？　構わぬから匆よしてくれろ？　よしわかった。では今から、葛城山の罰利生の妹のもとへ、天を喰らわぬばかりの恐ろしい死の黒竜を送るこ

とにしよう」

私怨ヶ池の漫々^{まんまん}とたたえた夜明けまえの水が、小枝の先で熾火^{おきび}をかき回したように、ぱっぱっと空を染め抜きながら、いきおい調子づいて燦^{さん}き出したのは、じつにこのときである。

壺すみれ

私は草に坐し、四方を顧眄し、冷たい日景の梢に目を向けた。

標高ある高原の寒さは、夜明けとともに朱色に染まった。浮かんで見えた湖水は、ガラガラの砂礫をふんで眺める美しい山上湖に姿を変えた。

さらに見あぐる雪のみねは、カブよい端正な円錐形でもって、ただちに霧ぐむ湖面にその姿を落とした。汗ばんだ木瓜の花の生暖なのではなく、雪の下もみじのようで、凜とする。

瓔珞みがく、とて、歌いてつきず、あやにくにて、みなもとの別に、雪消の泉、珠と湧きけり。

古畫のとおり、美事な圈谷壁は、湖沼が点在した原を取り囲んで、いよいよ、水は清い。

外へ滑り落ちる斜面をのぞくと、いちめん黄色く見えた。兔菊が咲き群れている。

と、さつきから壺すみれの淡い影が、ちらりと暗い水あかりから目を誘う。

おやと思った。

じつさい下草の間に、雑木ばかりが枝を繁まして、花はちつとも咲かない。が、水のうえへ落ち着いてしまえば、影は淡く垂れひろがり、やさしい狐火でも見た心地になる。

溷に膝をついて、てのひらに水を掬えば、耐力なく掬えそうになるほど、伶俐そうに、くつくつと五枚の葩をうす紫に浮かせている。りんりんと鳴く、水に咲く壺すみれ。ちよつと美しい。

高い冷たい山かぜは、ひりひりと頬をこすって、あなたこなたを厳しく流れる。

やわらかに揺するひなたの、おっとりした美しい湖沼風景を目に

いれても、にわか骨の髄から寒気がくる。

オオシラビソの日陰になって、ぶるぶるとふるえるゆび先をつかって、袂からまた燐寸リンセンを擦る。

鼻からしこたま煙を出してみると、遠く雪の崩れる匂いがした。夜のとひと味ちがうのも、あまりに草木が風を篩こすせいだ。

して、古畫の墜緒ついでを紹こうと、遊獵者にでも成ったつもりに、湖沼の縁から縁へ、高低の乱れた灌木かんぼくを見渡しつつ、少しばかり鳥の啼なかぬ静けさを歩いた。

遊獵者のつもりでは犬が欲しい。独歩どっぽも犬の臥ねた切株のうえで書を読む。ひとではならない。猫では逃げる。たいていは私が反対するのだったが、ひとつもらおうかと思う。

して犬はないが、水辺が恋しく、樺のなお青いのをそれるなり、岸の砂地へおりて、りょうてを水ひたに？す。思かたったより鉦水かたい冷たさがある。また、驚くほど倒木たおきの目立つ底景色そこげしきを見せる。匂いを調べようと顔へ近づけると、ちよっと飲めるらしい。

古畫では毒沼といわぬばかりで、ああら食いちがう。てのひらに透明が光るかと思えば、万々まんまの花しょうぶのひらひら靡なびくの背景に、やや美しく青味がかつたのが画になる。風景を味う茂から、ちよっと腰を浮かせて、また、おやと思つた。

匍松はいまつの野道をだれかまともによつて来る。

おりおり躍おどる黒髪を、ふわりと左手にまとめ、右手の白い小さい花を香かぎながら、ぶらぶら来る。

壺すみれがりりんりと揺れるらしい。

いったいに女性とは花そのものである。

異論はあるまい。

百合子だの、桜子だの、茜あかねだの、美咲だの、名によく咲くくらいだから、娘もそのつもりで花たばを編んで、すっぽりいたた戴いたく。

なるほど美しい。銃音じゅうおとの連発つひに随喜する娘なぞ、ちよっと近より難いだろう。

ぶらぶらした足どりが、湖沼をへりどつた白樺へ隠れれば、それ

ぎりである。あとは静かな溼がある。娘も、私も、知らん顔を突き合わせずに済む。が、雲上の冷えきった空気を胸いっぱい、長いまばゆい黒髪が坂の黄色い面を横切ったから、これはばつが悪い。出した腰をまた茂へ落とす。なにやら疾しい表情があるから、私ですること妙につまらない。小鳥のすぐ爪先へ休まったのを息を殺して待つのはこれに近からう。お互いの無人を満喫できなければ、やはりばつが悪い。

いっぽうこちらを知らぬは、微笑をかたぶけて野花を香ぐので、少うしうつつむいて歩く。

十七、八くらいであるうか。清潔な短い白襯衣を着て、喉もとと手くびのところを釦を掛けると、桜色の飾玉を襟から胸へ一条にたらずから、涼しそうな装である。

ふたえの大きい眼はありがちな切れ長でなく、まばたきのたびに、ばちはちと愛らしさが手に取るようにわかる。

肌の薄いのには、頬といわず、顎といわず、肉がひき締まっているが、どことなく娘つ気が抜けきらない。かえでの若葉がつんと澄ましたところを、青く見せる。まさに壺すみれの品があつてよろしい。永らく見あぐるうち、果たして娘の方でもひとめ見返した。細いからだを浮かぶほどに立たせ、姿勢は崩さず、なんの拍子かに、ぱつとこちらを見た。

確かに黒目の動く美しい刹那を意識した。

壺すみれの薫りが骨に徹える。

相手の顔が赤くなった。

ぶらぶら来ていた感じがなくなつて、耳の付根まで赤あかとなつた。ちよつと可哀相に思う。

だれも居そうにない溼を、見たことのないのに邂逅したで、すっかり魂消たのだろ。こちらでどうのの以前に、野花を落としたか、行きかけの体を斜めにねじつて、背をぬき出した。

つい頭のうえでは下枝の生えた木の葉が微かにそよいでいる。

ぴちゅりと鳥が啼く。

何鳥なんだかわからない。

またぴちちゆりと啼いて、枝を渡る。

ほかにもがさがそと木の中が鳴る。

ぴちゆり、がさがさ、ちゆりり、ごそごそ、驚くほど近いらしい。
燐寸をことさら擦ってみる。はたと声が已やむ。ちよつと哀れな。

小鳥というものの如何に気が小さいかしらん。こちらに気のないものを、あちらで身を絞め殺すのには、いつも閉口する。いつそ大声に任せて追い払うがいい。

と、青い腹を叩いて鶇うぐいすつぽいのが羽風はかせを立てた。

ふつと影が落ちる。

くちびるにはつきり微笑うしろめの浮かぶ、その下の一すじの桜色。

見あぐれば見あぐるほど、壺すみれのりんりんと揺れる覚えあり。意外に思う間もなく、いよいよ、その顔つきは用事ありそうな科しないっぴぎの密蜂。

古畫にのみ罰利生の妹を知らない。から、顔のありさまも勿論わからない。

が、民話から敷居を飛び越えて、生きた二本の足で歩くとしたら、壺すみれのうす紫に薰るこの娘だろつ。

峰はさびしきこの湖沼いけに

さきて出いでにし壺すみれ、

一花いっかいだきて唯ただひとり

低くしらぶる春の寒かん

歌つて、ちよつと目の覚める。

壺すみれは黙ったように後ろへ立って、笑いそうなくちびるを割る。

美しい声の冴えざえと、我がこころここにあらず。

さあなんとやら。

さて、かようから不本意な咒のろいをかけられた沙金とは、兄おもいのやさしい生娘で、その上わけへだてない思いやり深いところなぞは、いかな白日盗はくじつとうをなす悪党どもも、これ沙金ばかりは一しずくの血汁ちじるも見せてはなるまいと決心するほどの可愛がられようにある。

ある葛城山のねぐらでもとりわけ寒い冬の日のこと、手袋を念入りに扱しいた沙金が、ひとり鼻唄をまじえながら、油火あぶらびのよこ穴から贅殿にえどのへ差し掛かると、偷品とうひんでもめぐつてか、かたわの老人と、鼻のない若者と、二三人ずつに別れて、すでに二十合じゅうじゅうの斬りむすんだあとの荒息あらいきに出くわしたことがあった。

なんでも罰利生の不在い不在日いをねらつて、？々しばしばこのようにつまらぬ死人が出る。耳を蔽おほいたくなる下卑げひた罵声ののしがきりきりと轟とどろき、娘のつま先から脅おびえきつたのはいうまでもない。

が、そこは同胞ひとりでも隔へだてなく思いやる沙金のこと、やには泣音なみねの進まらんとするところを咬かみこらえながら、白い細い右腕みぎうでをまくり、ひだりの二の腕まで着物を紮からげ、いさんで剣の中へ駈かけこみ、

「恐れながら、孰いすれの御方おんかたも御刀を下ろしますよう御頼み申し上げます。右手みぎての御方おんかたも、左手ひだりての御方おんかたも、いずれも私のりよう腕うでよりも大切な家人かじんにございますゆえ、御一方たりともいま失うことは私承知わたくしいたしませぬ。もしこのまま切りむすぶというなれば、右手の御方は私のこの右腕を、左手の御方は私のこの左腕を、どうぞ御斬り落おちとしになってから、さあぞんぶんに御合戦かっせんなさいませ。さあ、ぞんぶんになさいませ」

と、涙ながらのふるえ声をいたいけに張り上げれば、いかに逆上のぼせあつた悪党どもも、愛くるしさにこころ奪われ、殺気も厭気もへたへたと水素瓦斯すいそがすを抜いた護謨風船ゴムふうせんのように縮ましたのである。

あとから聞いた罰利生、さも仰天して、沙金の美しい腕うでいっぽん、

きさまらの幾千の命よりも貴い！ と下人の土耳古帽を一撲り。
またあるばかばかした春の日のこと、沙金は洞穴に住いながら無類の桜好きが評判で、桜もよのうの曙染ばかり得意そうに羽織っているのがつねであった。

「散りこぼれてからも美しい花つて、桜のほかにはないと思うわ。雪のようにふわふわ行き交いながら、明るい夜の底を音もなくうずめてゆく。ああただわ、胸がわくわくする。もしもだれかに咒殺されでもしたら、きつと桜の海に沈めてくださいな。そのとき、私の死顔がふつと微笑むの。素敵じゃないかしら、罪も罰も、桜の花びらがすっかり吸いとってしまうの。桜、サクラ、さくら、まあ美しい。」

春雨に

いたくなふりそ櫻花

いまだ見なくに

散らまく惜しも

ねえ兄さま、なぜ私の名に桜が見あたらないのかしらね」

が、兄のとりきめで一歩も日のもとを歩けぬ身とあらば、葛城山へ咲上る姥桜すら見たことのない哀れの身。

がんらいが兄おもいのうえ気のやさしい沙金のことだから、きつと困らせてはならないと、ひとことも不平らしい不平を口にせず、ただ地中へ迷い込む春の香のうちに、どこか遠く咲きこぼれる桜を思い暮らすほかなかった。

ところがある梅花雪とこぼれる三月中旬の払暁のこと、いつものように吃逆を押さえながらとろとろした目を覚ましてみると、沙金が顔を出すよこ穴というよこ穴が、足のふみ場もないくらいに桜の枝が山積みになって、天も地もないほどの桜づくし。

風孔という風孔から、美しい桜の葩がおどり狂うので、冬吹雪にでも遇ったような、目も鼻も口も開けてはいられない心地のよい苦し。

「まあッ、まあまあッ！ これも、これもこれも、桜のはなびらに

ちがいないわ！ みんな起きてちょうだいな！ こんな朝ってないわ。私のたつての願いが叶ったのよ！」

こうなつては沙金の喜ぶの喜ばぬのの狂躁まわめになく、なかば嬉し泣きの半狂乱はんきやうらんの少女じやうねとなつて、胸いっぱいむねいっぱいにすくいあげた桜を、ようようねぐらの隅々へにぎつてはまき散らし、にぎつてはまき散らし、桜を胸いっぱいむねいっぱいにねり歩く。

なにごとかと冷や汗をぬぐい飛んできた罰利生が、あとから桜まみれに成れ果てた沙金と、こっそり里の桜を刈入かりいれれた同胞らとを、こもこも頭から叱りつけたのはいうまでもない。

が、そのなかでも坐らされた沙金は、叱られたところを小鼻へとまった、ひとひらの桜の葩はなを、ふっと一息に吹きながら、ただ照れたように笑つていただけであつた。

その日も確か、罰利生が和泉いずみの國でひと騒ぎもふた騒ぎも大暴れすると、山のような偷品ちゆうひんを檳榔毛びんろうげの車にゆすつて帰つたとかで、ねぐら中わき返る随喜ずいきのうたげに、沙金は玉の髪飾かみかざりとか、上品じゆんひんの袿かみとか、とにかくあでやかな上臈じやうりやうとなつて、兄のひざへも乗らないばかりに徳利とくりを倒していた。

また兄は、一合の晩酌ばんしやくに赤くなつて、同胞の各おのに願いを問うと、それらへいちいち、きつと？かなえてやるう、と約束する酔狂すいきやうを始めたのだが、願ねがいといつてもばさばさ人を斬る偷人のことだから、月卿雲客げつけいうんかくの御屋敷ごやしきを乗ッ偷る、だとか、浮線綾うきせんあやのふち取つた青い簾すだれのはこでなんぞをしたい、だとか、慾よくといえは金、金といえは慾よくといつたありさま。

いっばい機嫌かじの頭かしはいずれも、きつと？かなえてやるう、と額かぶの上に猪口ちやくくをあげる。が、いざ沙金の願いをいうののぞみ、愛あいしきものが呐々とつとつと語り始めれば、しぜん酒の斟くむのも忘れがちになる。沙金の願ねがいはこういうもので。

「私わたくしですか。私わたくしのは、その、御金ごねなんぞなくつとも、ちよつと山を下りまして、にぎやかな里で暮くしていけたらと、まあ、夢ゆめにみるこ

とがあるのです。

もちろん手まえ勝手ないい分ですから、兄さまが御容赦ゆるし下さらないことも重々承知していますし、これほど皆さまに可愛がつて頂けるうちで、私わたくしめ奴も鳥おし澁がましく思うのですが　ただ、私はただなにか、いまの世のため人のために、なんでもいいから尽くしてみたいと、ときどき胸が熱くなるのです。

兄さまなぞは、まかりなりにも世の中を広く御見聞なさっているわけですから、私のいうことなぞは、まるで赤兒のぐずぐずのように御思いなさるでしょうが、このような審に育った女としては、それが唯一の願いなのです」

これを聞いた罰利生、甚だ胸を痛めたと見え、このような黄金の釵子も、紫?の袷も、里の媪が血眼になって欲しがる代物ぞ。このうえ御前は奚を?めるといふのだ、とたちまちやつきになれば、いよいよ、なにもいわぬ娘になって、しくしく袖を嚙んで泣くばかり。ほかの偷しか知らぬ偷人であれば、どうして乙女の囁語を相手にするものがないが、罰利生といえは、若いものうちで突兀して頭の切れる男。いち早くおのれのが偷人の風にふむきと見限るがはやいか、娘らしい心の奥底まで推量つて、かくなる上は、おのれの我儘を通すばかりに土中に幽閉するのではなく、いまからでも炎天の埃と疫病にまみれる世へ擲却り、膏の取れるほど劬勞をさせる方がいつかひとの親となる日のためにもよいのではなからうかと、寢静まったあとの微黯い油火の明りのうちに、思いふけた。

二、三日中は妹とも、またほかの誰とも口を利かず、四日目の朝になると、ほとんど怒鳴らないばかりに、まだ眠い目をこする手をひき、霧ぶかい洞穴の出口へ隻眼を睨ませる。

このとき、虚を衝かれた沙金の瞬いた目には、ちようど朝霧の間から向うの、高い寒さに梢の上だけをばあつと日に染めた、秋の葛城山が広く黄ばんだり、赤らんだり、さも色彩そくに映り込む。

それから兄はこういった。

「乃公の可愛い妹よ。」

いままで御前の気持ちは秋毫もわからなかった、愚図な兄を容赦して呉れ。

識つてのとおり、父母を檢非違使に殺されて以来、御前だけはと

誰からも護りたい一心で、こんな土を嗅ぐような窖へ藏していたが、肝心の気持ちか？わねば、？まったく？だ。

なるほど。いわれてみればみるほど、沙金は土中の偷人より里の暮しに適っている、乃公や父母の道連れはいけない。

さあ、この石の多い河に沿って、半日ほど歩いたところへ、唐破風造のてごろな家を用意しておいた。世話人もいる。そいつの教えられるまま、啞をつけば、じきに里の暮らしにもなじむだろう。ほら、さっさと行け行け」

寤き抜けも寤き抜けのところを、かように断念した兄に駭然として、あとから差し出す下人の柳行李もそのままに、いたいけな前髪の奥で泣音をもらす。

が、こうと極めたら梃でも揺かぬが罰利生。愛するものが百年泣こうが、千年喚こうが、太刀を？尻に佩き反らせて、決してねぐらへ歸さぬつくばりよう。

須らく折れるはいつも妹の道にほかならず、一しきりまつ毛のさきへ涙をためると、ただ黙々と柳行李を抱き受ける。

そして、なにやら恋しそうな眼を上げて、りと結んだ口をとうりくかと思えば、ひとこと「御達者で」と後ろ足を退く。

あとはおのずから身をひいて、河の岸端を下るのみ。

これ妹の旅立ちと罰利生、その姿を河の岸、松の間にいつまでも胸を張って睜ていたが、やがて明けたばかりのあやふやの空に、まるで線香の煙のような一すじの雲が中空に棚曳いたかと思えば、見る間に遅しくなつて、いままで杳眇と晴れていたのが、にわかになつ暗くなる。

下人が亡羊し出して、これは如何に致したことだろうと、土耳其帽を目深にかぶったか、こんどは天を傾けて、まっ白に驚然と雨がしぶきを上げ、これが折ともなつて、神鳴も急にすさまじく鳴りはためくかと思えば、絶えず稲妻が梭のように飛びちがう。

このなかでも、狐鼠と藏れる下人の盾となり、はらはらと手をこまぬいているのは、竄か山麓ですくみ上がる妹の、こちらへ何かを

叫ぶ姿を目成っている。

と、鍵の手に群がる雲をひつ裂いて、稲妻かと思えば夫でもない、深紅の爪を閃かせて、真一文字に愛しきものへ落つる十丈あまりも黒竜が、朦朧と映る。

これがほかでもない、怨むものの恃める咒である。

さて、沙金がかたりと横様に僵れる時分には、嚮からの風雨も、大地を啖裂く神鳴も、真黯な空がきれぎれに明けるとともに、本命でも討つたように影をひそめる。

身動し得為で転がった下人も、屏風巖の影からまぼしそうに片手を目の上へ翳している。

過ぎてみれば、復らぬものは沙金ばかり。物狂しげに岩から岩から駆け下ようが、競々とうち顫えて松の根がたへ地鞆を踏もうが、ひやりと兄の腕に寄りかかる沙金は、額に吸いついた前髪を直そうともしない。お寝坊といわれ眠い目もこすらない。これから世のため人のためにと、その身を粉にして竭そうにも、からだはいまにも鍊丸くなって、重たくなって、笑もなく、慍もなく、可愧がる赧面もない。

たかが桜に夢中になって、雀躍しながら胸いっぱいをまき散らす、あの桜まみれの幸福な嬉し泣き。こんなことになるならば、國中の桜をあおぎ見て、手に手を取って旅して生きる、豆腐のような人生が、今よりどれほどまじだったかと、甚麽ときにも青息を？かない罰利生、このときばかりは壑ぶかい笈川の流れに沂うがごとく、噴薄激盪のなみだを哭き出せる。

壺すみれ 二

四辺あたりいちめん急に薄青くなる。

むらむらと立った白樺の細い幹が、やにわに白絹しろきぬのやさしい光沢あじを滅なくして了しまう。

と、ちよつと雲切れ。

つるつるした瀬戸物でも碎わるような四十雀しじゅうからの聲が、水に響く。

つびつびつび。

啼なげば響く。啼かねば啼くまで響かない。響く水からふちなしくれば、どこからどこへと啼く鳥かな哉。

壺すみれがあつと手をひく。

香が残る。

ぬれた深みどりの葉より、野ばらの白くこぼれたのが乙女を咬んだ。

こゆびを口に忍ばせ、しらべて、血をなめる。

濃い赤い葡萄酒ぶどうしゅのような鮮烈あざやかさを、つくづく眺めては、不思議そうな目つきが美しい西洋画を思わせる。

いつの間にか野ばらの褥おしとねは繰り返された。

Rose, oh reiner Widerspruch,

Lust,

Niemandes Schlaf zu sein unt
er soviel Lieder.

プラハ生まれの詩人は薔薇バラを吟うたった。

純粹な矛盾、よろこびよ、このように夥おびただしいまぶたの奥で、なにびとの眠りでもないという。

美しい詩とは、心の水にひたつたまま、ふとした折に口を流れる。つねに追うもの、それはいすかの嘴はしも口舌かいしゃくである。

いつぴきの密蜂が帽子の上を歩きまわり、よけいに細長いと思われた、水あめみたいに透明な羽根がぱつと消えれば、いずれ虎斑とじふのぶんぶん蒼つばみに舞い上がる。

遅く、早く、それを見あぐる壺すみれ。

熱っぽい間あわいがある。

「馬鹿だねえ。まるつきり、あなたのことを処女のように考えていた」

「処女？」

大きな涼しい羚羊かもしかのような眼を、そおつと水の上へ向ける。

林の中にいつぱい日が照あって、どちらを向いても、ぬれたように燦爛さきはと、銀色の斑に吹き払われる。

「それで、営林署えいりんしょの建てた山小屋は見つかったのかしら？」

「ふうん。じつは、そんなのどうでもいいんですよ。見てのとおり、ちよつと道楽です。ひとに会いたくないんだ」

「そう？ なら残念でしたわ。びっくりなすつたでしょうね」

叮嚀ていねいに梳とかした黒髪を、襟えりより器用にわけて、ふたつの半円を描きながら、左右の乳房に落とす。

「なにが」

「なにがって、すつかりこうよ。私みたいなわかい女がひとりですつて来たものだから」

「ああ。ばつが悪かったんですよ。から、茂みへ隠れていたのですが、気の毒だった。ひどく浮いた調子だったもの。小鳥のように逃げて行くと思っていたんですがね」

物思わし気にくびを垂れて、りょうてを膝の上へ落とし、片々かたがたの手をはんぶんのり啓ひらげた中に、そつと白い小さな花を渡す。

「つまり、偶然こちらへいらしたのですね？」

「まあ、そうです」

「ほうとう？」

とつぜん林の奥でなにか物が落ちた音がした。

私も、壺すみれも、くびを列そえて聞き耳を立てる。が、それぎり

だった。

「じゃあ、この池の秘密やなんかも、みんな知らないんですね。そうですね。こんな美しい湖沼の、けれど、恐ろしいお話とか。昔っから、だいたい、名前だつて聞かないのでしょうか？」

ひとり淋しそうに足をくずすのを目の底に、口から出かかったものをとつさに已めて、まるで別のことをいった。

「そう？　じゃあいいわ。じつは私、あなたにお願いしたいことがあるんです。それで、失礼かとも思ったんですけど、こうして、図々しくご一しよさせていただいています」

「いやはや。お願いというのは、こんな歳のいった私でも、話になりますかねえ」

「ええ、もちろんですわ。おとなしく私の話へ耳を傾けてくださつて、そして、最後に私のする質問に答えてくだされば、つまりそれでいいんです。お願い、できますでしょうか？」

どう応えていいものやら、ちょっと言葉を継ぎもせず、ひとまず頷いた恰好をとる。

少なくとも興味というものの誘われぬわけにゆかない。見ず知らずの、また、美しい娘が思いつめて聞かす話とは、さあなんとやら。

鳥の羽音、囀る声、そよぐ、鳴る、うそぶく、大きな遠ざかる音　待てど暮らせど、壺すみれの言葉はそう軽く口を衝いて出な

かった。

象牙のような色白の額へてのひらを翳せば、その熱っぽさに目が覚めるほど、唾の娘の肌をこするような目つきで水を眺めるので、日光が面へ映つて小枝の繁みがちらちらするばかり。

半時くらい経つ。

と、りと結んだ桃色の口紅が、淀みもなくすらすらにり出す。

「ずいぶんと話さないでおいたものですから、また、私が生まれる以前のお話ですから、あいまいな口調もあるかも知れません。聞き苦しいこともあるでしょう、いずれにしても、聞いてください」

壺すみれの話 一

「ひと昔まえのことです。

ある地方のある家に、姉と妹とその母親とが、女ばかり三人で暮らしていました。

姉はべんべんしゃべれる強健い気象の娘でしたが、妹は今年やつと五つになったばかりの、押せば倒れる幼弱で、おまけにそっくり返つてせきをするくらい重い喘息持でした。

年が年中ぜいぜいって、大きな柱にひたいを打ちつけては、身を削られるみたいに泣いていました。

油気がない髪に、まっ赤なりボンをちらつかせて、鞆だらけの頬を妙に火照らした、ぜいぜいのみつ子ちゃんといえば、近隣も目を覆う妹のみつ子のことでした。

みつ子は家においてじいつと口をきかないおとなしい幼女でした。よく知らないひとが三和土に立つと、さもびっくりした表情で仏間へ走っていくので、友だちはできませんでした。

ですから、みつ子がかまってくれる姉の帰りが待ち遠しくて、日が暮れるじぶんには決まって玄関へ腰を下ろして、垢だらけの人形を抱いて、遠く暮れかかる新墓の垣を見つめていた姿が、よく通りかかる人の目にとまりました。

姉妹の母親は、ふたり目の良人を見つけてからというもの、銚や糸巻や針箱に囲まれて賃仕事に追われてました。ですから、わが子の顔すら満足に眺めるひまありませんでした。

姉が学校からひけて来ると、決まって裁物板の上からお帰りという声だけして、みつ子は次の間に倒れていました。ときにはむっくり起きあがって、ぼんやり姉の帰りを眺めていることもありました。ふたりで湯船につかると、姉はよく小さな背中にあずき色のあざを見つけました。ちょこんと湯に浮いた顔をのぞくと、みつ子は黙ったまま姉を見あげていました。

それから、米屋の二階をおん出されたふたり目の父が、いよいよ姉と妹と母親の家に越してきました。

母は大喜びで茶湯台ちやぶだいを拭いてましたが、姉も、みつ子も、階段が上がったつきり他人の家のようにふる舞って、飽きても飽きても綾あやばかり取っていました。

姉はへらへらした男にあるような、後ろめたい大人がきらいでした。それがなぜ母にわからないのか、歯がゆくって、つまらないのです。

母のまるで別人になって夜どおし笑っているのを障子の影絵を見るにつけても、いいようがなく、ただ、いらいらしました。

新しい父は、日やといの土盛つちかみが終わる頃になると、決まってお酒が入っていました。

大きな声を唸らせながら、どさんと上り口へ道具を投げたきり、たいてい怒った目で茶の間に寝そべりました。

そうなるしと獅子の目を盗むように便所はばかりへもゆかなければなりませんし、忍音おんねでしゃべらなければ、『ちきしょうってんだよお』と怒鳴られました。

また、ひどい酔い方をすると、角材をぶんぶんいわせて二階にも上がってきましたから、ふたりは押入の、そのまた板をはぐった屋根うら部屋にまでもぐり込んで、舌を噛むようにじいっとしてしました。

『おおおお』と唸り声上がるたびに、みつ子のふるえ方が、ちよつどひきつけを起こした子供みたいに、前髪をふりみだして、あごをがちがちいわせました。

姉は、馬鹿にふるえるなあとひざ小僧を搔いただけで、しがみつく妹の髪の毛を見おろしていました。

また、その頃からみつ子はひどい喘息ぜんそくをぶり返しました。苹果りんごの木箱にひっつかまって、ぜいぜい姉の読書する横でいって、絶息する勢いで千のせき万のせきをしました。

姉は途方に暮れながらも小さな背中に手をやり、つくづく妹が嫌

になりました。

夜どおし、窓掛まどかけが明るくなっても、みつ子の泣きやまないときは、姉は苦しがる妹の口と鼻とをてのひらでふさぎました。

みつ子は息がつまって木のしなるみたいにびーんぴーんと痙攣けいれんしました。

『このまま死んじやう?』

姉が恐ろしい目をむくと、みつ子は青く泣いて厭々いやいやをやりました。どんなことをされても、みつ子には姉が頼りでした。また、げほげほとむせ返って、きたなと思つたときの、悪鬼に引きずられていくようなあわれな顔を見るたびに、姉は小さな背に手を入れないわけにもゆかないのでした。

お医者さんに看みてもらいたい、そういうと、母はさも嫌な顔をして、

『騒ぐのはおよし。おまえだつて、ほら、持病なんだからね』

といったきり、茄子なすや胡瓜きゅうりやらを箆ざるに乗せてまたどこかへ行つてしまいました。

雨のつづくのと横ならびに、茶の間の酒くささもむせつ返るほどになつて、新しい父の暴力は、さかりがついたみたいに、もてあまし始めました。

妻である母でさえ些細なことに平手が飛んで、環境に対して裸同はだか然のみつ子などは、かっこうの餌食えじきになりました。

帰宅した姉が、寒々しい顔をして傘をつぼめると、いきなり縁側からどなりが上がりました。

蝙蝠こうもりのように両足をにぎられぶら下げられたみつ子が、泣くやらあえぐやら顔を赤く笑うようにしかめて、妙な音ねを出しているのです。

『うんせえ、おんなじことばかり、いつてやがらあ』

酔っぱらいは五つの児をつまみ上げては吹き払い、つまみ上げては吹き払い、悪びれる調子は一つもありません。

姉はぬき足、さし足、襖ふすまのうらに立つて、妹を見殺しに、ただ肌ひぶ

の弾はじかれる音に耳を澄ませていました。

みつ子が自分を見つけると、むしゃぶりつくように迫って来るので、その後で一しよになつてなぐられるのが面倒くさかったのです。どうせ喘息です。

ひとつ殴られようが、ふたつ蹴られようが、苦しさにちがいはありません。

姉はじぶんだけ二階の座敷に上がつて、ごろんと畳のうえに寝そべると、みつ子が死んじやうなあと平気でつぶやきました。

妹の虐待はその晩じゆう階下したから聞こえました。

朝になると、冷たい廊下へ頬を寄せ、干いた衾かわを顔いっぱいにつけたのが、見ると息だけしていました。

みつ子は三度の飯よりもしるこが大好きでした。

庭を通ると、茶の間にひとり鎮座ちんざして、さも大事そうにしるこをなめている姿がよく見られました。

こみ上げるうれしさの中で、しるこまみれの頬を、姉に向けて笑いました。

『みつちゃん、それ、ちようだい』

姉がいじわる顔をして縁がわへ寄ると、みつ子はてのひらの碗をじつとりとながめて、生つばを吸いながら、おそろおそろ食べかけたしるこを差し出しました。

そのときの不安そうなみつ子の顔といつたらありません。

そんなみつ子はもう、老人のするようにうす目をあけて、ぼうつとしていました。

くしゅつとあざだらけの顔をしかめたかと思つと、肺をしぼつて畳をつかみ、『お姉ちゃんお姉ちゃん』と水ぜめにあつたひとのように涙を浮かべました。

これを見るにつけても、じぶんをみにくく苦しめるできものでも眺めるふうに、姉は発狂しそふになりました。

腹がむかむかしました。

こいつを川に投げこんで、不要ひつない子犬みたいに死んだところを、

校庭にだらだら居残りして大声で遊びたい、そう思つて、妹をわざと泣かすようなことをやりました。

物で叩いたら、きよとんとした妹の顔から、ぼたぼたぼたぼたとはなぢ血が落ちました。

みつ子は、それでも姉にすぐるほかありませんから、『やめてやめて』とむせびながら、一生懸命に姉の気に入るように振る舞いました。

ちよつと舌打ちをやれば、すぐにもみつ子にっこりした顔は凍りつきました。

それを利用して、姉はおもしろく妹を泣かせました。

『なんで、なんで』

ふしぎなことに、姉がみつ子を泣かせると、新しい父の暴力は、姉を素どおりして、みつ子にばかりむかうようになりました。

しかも家にむつともつた空気は、それをそれとなく承知しているようでした。

壺すみれの話 二

それは冴しやうのつよい夜のことでした。

階下したではすでに翻筋斗もんどりをうつ酒乱が始まっています。

木曜日のみつ子の虐待の日です。

だれが決めたかそのとおりになっていました。

姉は妹を見ないように背中こもで外套コートの紐をむすんでいました。

『どこ行くの』

布団から起きあがったみつ子が、不安そのものの様子で、そわそわする姉を眺めていました。

『すぐそこ』

『お庭？』

『先生ちん家』

『なんで』

『なんでって、今夜はみんなが集まる約束なの。ちょっとしたら戻るから、おとなしく寝てなさい』

みつ子は急に恐ろしい顔を外套こもに押しつけて、厭々いやこやをやりました。『だってすぐだもの。ちょっとみんなで、お勉強するの。お茶をのんだら帰ってくるから』

『あたしも、あたしも』

『馬鹿ばかいわないで。そんなことしたら、いやだわ。みつ子はおとなしく、ね、ね、ね、』

妹にとって、木曜日の夜は姉だけが心の頼りでした。

最終的に酔っぱらいから命を守ってくれるのは姉だけだと、信じて止みません。

ですから、むしゃぶりついて必死ひっしで厭々いやこやをやりました。

『こわい、こわい』

『だいじょうぶよ。お母ちゃんがいるときのあいつは、朝までやらないから。いざとなったら、そら、ぐったりしなさい。教えたでし』

よう？ なにやっても、ぐったり』

みつ子はちつとも治まりませんでした。

それどころか、目に涙をこんもり溜めて、姉のふくらはぎをぎゅつと抱いたまま、畳に腹ばいになりました。

『みつ子、いい加減にしないと、』

『こわいの、こわいの』

今夜の集いは、虐待のとはちりを避ける姉の口実でした。

あわよくば友だちの家に泊めてもらおうと、てまえ勝手な考えをめぐらせていました。

『放しなさい、放せてばっ。放さないと、もういつしよに寝てあげない。あーあ、そうしょ。もう二度といっしょに寝てあげない』
みつ子は悲しいほどびっくりして、あわてて首を締めあげるふうにして、のどのところで、せきをこしらえて見せました。

ひゅんひゅんとのどを苦しませれば、姉はじぶんを見かねて介抱すると思ったのでしよう。

ですが、その態度が姉の癢にさわりました。

『うるっせえ』

姉は妹の背中を蹴って、押入のふすままで突き飛ばしました。

もうみつ子の世話を焼くのはうんざりでした。

課外を休み、友だちとの約束を断り、それから陰口を叩かれるのもうんざりでした。

みつ子は『くるしいくるしい』と柳絵の襖紙へばりばり生爪を立てて、身もだえして泣いていました。

そのどれもが、いまの姉にはいやらしい演技に見えましたから、肌かわがずりむけるほど怒って、

『やれやれ！ そうやって、大きなおせわ！ そうやって、とつとと酔っぱらいになぐり殺されっちまえ！』

破竹の勢いで咳き込むのを残して、とうとう家を飛び出しました。姉はせいせいした涙を浮かべて、上ずった鼻唄を寒空へ聞かせました。

汚い家から、馬鹿な酔っぱらいから、ぜんそくの妹から解放されて、足につばさが生えたようにどこへでも行ける気がしました。かと思えば、どの野路を横ぎっても、さみしい道ばかり通っているような気がして、なりませんでした。

氷のように尖った月も、長い土手のひよる松も小松も、うらの林をどつとふき鳴らす凧も、じぶんを笑っているみたいで、むなし腹だたしさに、なお腹が立って、とぼとぼと暗い夜道を歩きました。ときどき『お姉ちゃん』と、しばかれた声を耳底に聞いて、誰もいない煤けた長屋通りを、ちよつと引き返してみたりしました。

ですから、伽羅や松や躑躅や木犀など茂る庭をまたいで、三尺の半床のある先生の書齋へ通されても、出流れの温い茶をクラスメートと啜つても、いまいち腹の底から出して笑うことができませんでした。

広くない畳の上を、洋燈が載った朴の大きな机があったり、桐の古い本箱が立てつつげにあったり、したものですから、その晩には七人の生徒の座布団で、部屋はすし詰めでした。

Stirb und werde!
Bist du nur ein trüber Gast
Auf der dunklen Erde.

と、先生はびっくりするほど早口に叫んで、おつて耳なじんだ言葉にかえました。

『死せよ成せよ！ このことを体得せざるものは、暗き地上の悲しき客に過ぎざらん。』

こりゃあ《幸福なあこがれ》ってえ偉大な詩の最後の句で、いままで数おおくの解釈の試みがなされちゃあ、ふんざりがつかねえつてんで、炎の中に焼け死ぬことに最高の幸せを求める蝶、とでもいつていいもんか、ちよつと美しい英知だろつ』

ドイツの詩を叮嚀に手書して、いきなり姉に読ませたり、ひとり

ひとり意味を聞かせたり、先生はとても熱心に口をはたらかせました。

姉たちは、無知に対するつまらなさを知りながら、詩のもつ恋物ロマン語を肴さかなにちよつとおしゃべりをして、先生の教壇に立つのと別人の口のききよの可笑しさや、奥さんの意外に都会的なことやらで、暖かにした書齋の内できめきました。

先生が奥さんから手まねきをされて筆を擱おいたかと思うと、廊下から低い忍音がもれて、まもなく姉だけがちいさく呼ばれました。

姉はいま笑ったばかりの顔をして、そのまま茶の間に通されました。

先生の顔はさも注意ぶかそうで、そのくせ、茶湯台の餅菓子が竹の皮に入つたまま出しているのも平気でいました。

姉はどきどきして型の小さい廉やすいオルガンやら、折に入つたためずらしい鮎ふなのかんろ煮やらを眺めて、不思議そうに黙っていました。

『お前めさんの家うちなあ　町だな。エ、そうだろう』

『はい』

『番地にちげえねえ。そうだろう』

『はい』

『ああ！　恐れ入った！』

先生は四書五経しよごきよけいの素読本を畳に落として宙を眺めるふうに、

『お前さんなぜ、家庭の事情を黙つてのこのこやって来たんだ、知れていりゃあ、うちの戸に錠をぶつ差してでも追い返したつてのに』

『……………』

『過ぎちまつたことをおいおいってものはじまらねえ、お前さんこれから先生といっしょに病院へ行って土下座つてもんを見せねえと体裁がわりい、なにちいつとばかりかしまずい角に立ってやがんだ、ひよつとしたら、お前さんの家族が、文字通りばらばらになつちまつてもんよ。まあ、一にも二にも、すぐに外套をひつかぶんな』

病院という言葉聞いて、姉の心は思わず総立ちになりました。いじめてきた妹の身に、きつと何かあつたにちがいません。

姉は胸が裂かれそうに思い、しっかりとりよう腕を抱きましたし、先生は首の疣ほくろのところへ手をやって黙っていました。

ほかの生徒たちは、奥さんからしきりと頭を下げられ、興味にいらだつたような目つきを茶の間へ向けながら帰って行きました。

外に出ると、枯れ林のこずえの横に、さむい光を放っている新月が見えました。

凧は去って、道は落ち葉にうもれて、その上を革靴が一足ごとにカサカサと暗闇を響かせました。

姉は、日と月と一時に沈いつたすさまじい気がして、胸がぎゅつとちぢみました。

ですから車に乗って、窓から夜の華表とじょうの過ぎるのを見るにつけても、ひじの先まで涙が伝いました。

『ひとつ、聞かせてくれねえ、こりゃあ重要な問題ってえやつだ、いま聞いちまつておかねえと、これからつとときに、ちよいと追っつかねえ話になっちまう、いいづれえこともあるだろうが、ちよいと聞きくぜ？』

お前めさんは、じぶんの妹に、なにをしでかした？』

姉は、柱と柱との間に小さく押附しけられて了しまつたみたいに声が出ません。

『どうしてえ。正直に答えてみるってもんだ。誰にもいいやしねえし、それを聞いたからって、こつちとらお前さんを見捨てたりやしねえ。』

ただ、事実を知らねえことにや、先方の怒りを静しずめる方途ほうとつてもんが見あたらねえ。

どうだ、お前さん、じぶんの妹に、なにしやがった？』

『いろいろな事をして、泣かせました』

『いろいろつてえと？』

『髪の毛をひっぱったり、お腹をつねったり、口をふさいで息をさせなかつたり』

『不如ほし帰きじゃあるめえ、なぜ泣かせた』

『うんざりだったんです。あたしだってほかの子とおなじように遊
びたいし、ぜんそくぜんそくって、朝まで付きあわされて、いつそ
死んでくれた方がと思いました』

『おい』といって先生は、竹藪たけやぶの途中で車を止めました。

『もういつぺんいつてみねえ。だれが死んでくれた方が、だって？』

姉は涙声を枯らせてごにょごにょ口ごもりました。

『おい、いいか、よく聞きねえ。絶対に、死んでくれた方がいい人
間なんざ、この世にやいねえんだぜ、まして、母親から血をふんだ
くって、互いに分け合った妹のことだろう。』

お前さんは甘い、甘すぎる、蟻ありのたかったあんころだ、そして若
い、若くって、泥賊どろぼうだって風上に置きやしねえ、過ちだって犯す、
べらぼうめ、よく覚えておけ、過ちをするならするように、もつと
日の下で立派にやれい、同じ叱言ごいごをいうんでも、その点だけは恐れ
入ったと、鼻毛を算よまして讚ほめて遣わるんだ、人様の目をこそこそ盗
むまねしやがって、なにも出来ねえ童わらわの腹あつねって、なにが面白
い、先生だからって偉ぶるんじゃねえ、人が人にいつてるんでえ、
おい、馬鹿野郎、ちゃんと目え見ろいッ！ いいか、てめえでてめ
えの髪をひつつかんでみろい、てめえでてめえの腹をつねってみろ
い、てめえでてめえの口をふさいでみろい！ どうだ、痛えか、苦
しいか、泣きてえか、そら、ぜいぜいいつてみろい、ぜいぜいぜい
ぜい、もつとだ。それを夜どおしやってみろい、そのうえ、ひつつ
かんでみろい、つねってみろい、口をふさいでみろい、死ぬか、生
きるか、わけねえな、死んじまうつてもんよ、死んだら、お前さん
なめくじが這った墓かぶんまえでなんていう？ 上等だってケタケタ笑
うか、わけもねえってんで小便ぶっかけるか、
妹ってやつあ、いる奴もいねえ奴もいる。うちなんかは、いる奴
だったが、いねえ奴になつちまった、肺に妙にちんくせえ名前のバ
イ菌がさわいじまって、倒れっこねえ猪が倒れちまって、この顔に
血ぶっかけて、ぼっくりだ。ひつつかむ暇も、つねる暇も、口をふ
さぐ暇もねえってんだから、気の毒な話よ。

そらあ生意気なあまつこで、なんどこの面あひつぱたいたか知れねえ、勝手に人ん家の敷居をまたいで、兄さんの嘘つきつてんで人様のまん前で万歳やりやがって、嘘つきたあなんぞのあげくがやいやいの口げんか、ここから出て行けつてんで兄妹あげての取っ組み合いよ、おんな相手にやつたわねとくりやあ、あのやる本気で出刃もち出しやがって、逃げる兄貴の首ッ玉を抱いてくれたかと思えば、チユウでもねえ、出刃の柄でもつてこのときめいた鼻をなぐるなく、衄が噴水だつてかまやしねえ、もうてめえの面なんぞ見たくもねえとこつちが叫べばあつちも叫ぶ、それつきり別れて十年と幾日よ、親父がたまさか電話をよこしてみりやあ、妹が浅草からみよし町の道すがらでぶつたおんたと、蚊の鳴くみたいにびくびくしやがって、ざまあみやがれ衄の噴水が祟つたんだぜ、笑う相手を目つけたつてんで悦に入つて見舞つたらば、あらいらつしやつたのねと生つちろい顔を照れたように泣きやがって、こつちももう一悶着おつ立てようと思うか思わないかに、いま死ぬところなのとかなんとか女じゃあるめえメソメソしやがって、勝手に死にやがれと百円の花束ぶつけてやりやあ、ほんとうに死んじまいやがんの、死ぬが死んだで、こつちも赤飯焚けえつてんで上塩梅かとくりやあ、ちきしよう玉葱が祟つて涙がとまんねえもんで、それを風呂釜いっぱいにして湯船につかつてやった。たいそういい湯加減だと感心していたら、あのやるういの一番に化けて出やがって、家のどこかで泣いてやがらあ、泣きが甘えつてんで、どぶ板ひつぱがして探しに探したが、こつちに申し訳ねえつてんで、いっこつ姿を見せねえ、向こうで見せねえものを、こつちが見るわけにもいかねえから、下げる頭もねえくせに、しかたねえつてんで兄貴の方から謝つてやつたら、あのやる現金に泣きやみやがって、おいちよつとゆっくりしていけ、てえたら、もうこの世にいねえもんで、こつちの声だけ高くならあ、ひとりだけ兄貴が残されちまつて、いってえなんの兄妹だつてね、金玉だつて片方つぶれちめえば、右なり左なりにちぢんじまつつてもんよ。

あーあ、ねじった鶏とじのくびを押しつけて白眼しろめをむかすんじゃないかな。
った。

あーあ、せつかく出来たお恋人あいてにちんぼこがついているんだぜだなんていわなきやよかった。

あーあ、てめえの兄貴は腹ちがいだっていわなきやよかった。

あーあ、あーあ、あーあ……。

妹なんて亡なくすんじゃないかなかった」

病院の高いくつぬぎに立つと、暗い廊下を背にして、死んだ父方の叔母が仁王におうみたいに立っていました。

お辞儀した姉の頭をしっかりとつかんで殴りました。

くどくどしいものはありません。ただ、帰けえれっ！ と泣きじゃくる姉にいいました。

『おッ、はじまらねえ、鍛冶屋の火造りじゃあるめえし、そうぽかぽかやるんじゃないやねえっての、ちよいと待ちねえって、』

先生と叔母は、ちよつと遠くの電燈へ連れ立ったぎり、なかなか帰って来ません。

姉は、矢も盾もたまらなくなつて、束髪たつかみの若い看護婦をつかまえると、みつ子みつこのことを根ほり葉ほり尋ねました。

『あら、みつ子ちゃんなら、いま酸素さんそ天幕テンマにいるわ。

ちよつとあれなようなの。さつきから警察のひとが上がっていく

の

『おおすじの事情がわかると、姉の頭の中は雪ゆきに覘のぞく樹皮こぶしみたいにささくれえました。

ぜんそくによって絶命する人は、年ねんに数えきれないほどだそうです。

すっかり放置されたみつ子は、気管支が海鼠なまこみたいに腫れあがって、ずっと呼吸のつまった状態だったのです。

もしも叔母が衣装や頭かぶのものを質しつに入れようと思立おもたたなかったら、もしも嫂せうの足あしにとわずかばかりを手にうちの門口かどぐちを叩たたかなかつたら、みつ子とはとくに二階で死んでいました。

『くるしいくるしい』と柳絵の襖紙に生爪を立てて、身もだえして泣いているみつ子が、思い出されて、腹が立つて、姉はじぶんの首をぎゅっとりようてで絞めました。ひゅーひゅーとへんな音がのどからもれました。頭の血が沸騰しそうで、目玉がぼんと弾けそうので壁から床から、悶絶のあまり体あたりしました。こんな苦しい。看護婦がカルテを落として走って来る音が、遠い雷のように聞こえました。目のうらがチカチカしました。『こわいの、こわいの』誰かがその背中を襖まで突き飛ばしました。息が出来ません、息が出来ないので、誰か助けて下さい、助けて下さい、この苦しみ、痛み、孤独、暗闇、嘆き、罵り、鼻涙、不安、神経、熱い、父、小さい、寒い、淋しい、淋しい、淋しい、誰かッ、誰かッ、
『うるっせえ』

それから聴診器を耳に夾んだ医師は、みつ子の服をめくって、しぶ柿をほき出すようなにがい顔をしました。すぐに看護婦へいつて、警察へ通報しました。

まず、叔母のすさまじい顔が廊下を引き返して来て、その後ろから、靴の先へ目を落とした先生が、隠袋に両手をつっこんだまま、ぶつくさ歩きました。

叔母は、姉の鼻さきへ指を突きつけて、

『いいかえ、天が荒れようが地が老いようが、海が枯れようが石が爛れようが、絶対におまえなんかをみつちゃんに会わせないからね。どんなに泣いて大声で叫ぼうが、金輪際、これだけは変わりやしないのだから、きっぱり覚悟するがいいさ。なんたつておまえは、みつちゃんを殺しかけたつていうんだ。蹴ったり、殴ったり、振り回したり、首をしめたり、お医者さまから、余すところなくこの耳底が書き留めたんだよ、この人の皮をかぶった耶穌の悪魔っ！』

姉は、いきなり胸ぐらを取られた人のように、息ができなくなつてしまいました。

みつ子の虐待は、馬鹿な酔っぱらいのせいです。が、自分もまいにちやっています。泣かなければ、泣くまでやっています。

『叔母さん』

『寄るんじゃないよ！ ひとに聞こえるじゃないか』

『みつ子に、みつ子に会わせてください。お願いします。一度でいいから、どうか、すっかり謝らせてください』

『あんだ、ここがどうかしたのかえ？ さんざみつちゃんをいじめ抜いて、今度は謝らせるだ？ 馬鹿も休み休みお言いよ』

『みつ子は、きつとあたしに会いたがっていると思うのです、きつとどうか、みつ子自身にたずねてみてください。お姉ちゃんが、涙を流してごめんねをしていると、そして、会いたがっている、そうすれば、きつと』

『くくくくく。ま呆れけえつちまうわあ！ やかましい！ 言艸いわずと、さっさと帰んな。可愛そうなみっちゃんはねえ、お姉ちゃんがこわいこわいって、いまもふるえが止まりやしなかつたんだよ』

壺すみれの話 三

姉と、みつ子と、このふたりの姉妹は、とうとうこの日を境に生き別れてしまいました。姉は捨てられたような母のもとで、硝子工場ガラス工場の手伝いをしながら学校へ通いました。

妹は、いつか寝台ねたいを移して、夜上りの澄みわたった富士を望む、とおい叔母のうちへと引き取られました。

母は、むざむざとわが子をあきらめたようでしたが、姉は、すっかりそういうわけにもゆきません。

ゆかないどころか、みつ子の誕生日になると、決まってうちであんなを取りました。

鍋に煮えたあずきをすり鉢へ移して、ていねいにすり、うらごしにかけてしぼり取りました。

また、ぐつぐつ煮たったところを小さい碗わんに別わけ、妹のよく座ったテーブルにいい匂いをさせながら並べました。

庭を通ると、茶の間にひとり鎮座して、さも大事そうにすることをなめるみつ子の姿を想像しました。

こみ上げるうれしさの中で、しるこまみれの頬を、姉に向けて笑うのです。

『みつちゃん、それ、ちょうだい』

姉がいじわる顔を見ると、みつ子はのひらの碗をじつとり眺め、生つばを吸いながら、おそろおそろ食べかけのしるこを差し出しました。

そのときの不安そうなみつ子の顔といったら、思い出すだけで、声に涙がまざりました。

姉はよく決心をして、稼いだお金のほとんどを手に、静岡の叔母のもとを訪ねて旅をしました。

さくさくと鎌の音のする茶畑の中を右も左もわからず、地図を片手に黒の大構おほのかまゑの門をくぐっては、冠木門かぶきから出てきました。

一番茶を摘む女の影を目さがししながら、たどり着いたためあての格子戸からは、孩を負ぶったあかの他人がそまつに顔を出しました。聞けば、叔母は顔みしりの呉服屋の担ぎ屋にいっぱい喰わされて身を誤ったうえ、三年まえに北海道か、鹿児島か、まったく法螺を吹いて夜逃げしていました。

みつ子とは、これでほんとうに生き別れてしまったのだと、姉は見知らぬ土地の夕暮れの中で、わあわあ泣きながら、珊瑚樹の垣にうずくまりました。ゆもじ一つになった男たちが、黙って見ていたりもしました。

心の龕に祭ってあった妹との和解が、ぼやっとした風がとおりぬけるのと同じように、薄らぐともなく痕を滅してたち消えました。姉が髪の毛をひつつむと『やめてやめて』とむせびながら、みつ子は姉の気に入るようなことはなんでもやりました。

ちよつと舌うちを鳴らせば、すぐになっこりした笑顔は凍りつきました。

なぜでしょう、それを利用して、姉は面白く妹を泣かせました。『とつと酔っぱらいになぐり殺されつちまえ！』

じぶんの帰りが待ち遠しくて、日が暮れるころになると決まって玄関に腰を下ろして、垢だらけの人形を抱いて、遠く暮れかかる新墓の垣を見つめているみつ子が、いよいよすさまじく見えるようでした。

来た、と思って立ち上がると、知らない犁を担いだ農夫で、みつ子はまたもとの通り、味噌漉のこわれや陶器の欠片など汚い石の上に腰かけて、鼻唄を歌っています。

鼻唄も、姉が器用に聞かせたもので、みつ子はすっかり覚えてしまった得意でした。

手桶を邪魔そうに横ぎった母と目があっても、みつ子はその目をまた遠くへやります。

寒いのでしよう、小さなひざをかさかさ乾燥させて、とんとんこぶしをぶちつけています。

『こつちいらつしやいよ』

おりおり風にのつてやつて来る、近所のちいさい子供たちの声に、知らず知らず耳を奪われました。

『あら、いやだ』 『あたいにも、おくれよ』 『いいかあ、一、二、三』 みつ子はふと我に返つて、淋しそうな背中を日景ひかげにこごめました。

そうかと思うと、また、つんと恰好のいい鼻を突き上げて遠くへ目を向けます。

鼻唄が止まりました。

見ると、遠い暮靄ぼあいの中を、姉のぶらぶら下校する姿が見えました。みつ子はぱあつと笑顔になって、立ち上がると、妙にしの竹へ身を隠しました。

姉はちいさな柄太鼓えたいこをおもしろく叩きながらやつて来ます。

ととん、ととん、ととんととん。

待ちきれなくなったみつ子は、人形を投げて生垣を越えると、むかえ撃つて姉のよこつ腹へまとわりつきました。

『みつ子も、みつ子も』

姉は笑つてなおも踊り太鼓のようにおもしろく叩いて聞かせます。みつ子も横あいから両手を伸ばして叩きましたが、ちっともおもしろい音がでません。おかぐらを踊つて、得意になって、ととん、ととん。太鼓をふたりで調べながら、ふたりいっしょに家に入っていきます

壺すみれの唇は静かに閉じる。

静かに風に舞うように、絶類の美を鳴らす。

葉末はすえに碎ける日の光は、風のすき間を見つけては、片雲せの急せく間にすさまじい俤おもかげを見せる。

「この姉というのは、私の母のことで、すべては母の話です。

母はよく、幼い私の手を引いて、ここへ来ては涙をこぼしました。分明はつきりとこの話を覚えているのも、負はぶられて、子守唄のように、いくとも聞かされたからに違いありません。

母はとうとう、妹のみつ子さんと生き別れたまま、名月の九月十日に亡くなりました。

その前日に、鎌倉から例の先生がお越しになって、

『早死はいけねえ、あんだけお前さんを説教しておいて、妹に会えねえまんまっつてな、この薄痘痕うすあはたにかけて許されねえっつてよ、尽力がたらねえ、ちいっつとばかりしるねえっつて、みつ子っつてな女は日本に多くっつて手間どっつちやいるが、なに、あした、あしたまで待ちねえっつて』

そうしっかり天井を見あげておられました。

私もなんとか尋ね出したい一心で、母の心当たりを旅してみましたが、いまにみつ子さんの居所がわかりません。

きつと姉が死んだことを、みつ子さんはわからないままに、いまでもどこかで姉を怨んでいることでしょう。

せめて、せめて。

母は生前いつていました。

姉の不人情な虐待を、またとない家族の生き別れを、怨んで、怨んで、みつ子は必ず、この怨みを晴らせると有名な私怨ヶ池へやってくると。それを最期の頼みに、と

淡々しい雲が集って、色にまがいそうな連山がその間に少しずつ。手まえを、山の風向をかえたのが、うらの樺林をどつと鳴らす。

「あらいやだ、鼈すっぽんだわ」

藻もや藺いや葦あしの新芽あしや沢瀉おもちかやらがごたごた生えた潁ほとりを、泥のしおつた丸い透影が底の方から浮かんでくる。

甲羅干いしほだか、水から頭を出して、赤ん坊のように手足で水をつかみながら、びっくりして引き返して行った。

「あなたは、さながら鼈が苦手、といった顔ですね」

「ええ。だつて、噛みついたら雷が鳴るまで放さないっつていうじゃありませんか？ あらいやだ、まだ他にいるのかしら」

「噛まれましたか」

「はあ？」

「そういえば、お話のあとで、質問があると、そのようなことでしたね」

「ほんとうでしたわ。でもすっかり、ふふふ、可笑しいわ。もう済みました。失礼ですし、

ところで、おばさんはいつから煙草を御吸りになつて？」

壺すみれはいつまでも邪気なく笑う。

銀色の霧が、高原の野をすうつと渡つてきて、ちよつとどこかわからぬ、水の先をあいまいに蔽う。

ころんころんと水の湧くような時間が、悲しみに似た新しい気持ちと呼ぶ。

「あなたにこの古書をさし上げましょう。

怨むものと、化坊主と、殺された沙金という娘の話が、擬古文ですけれど、あります。

これを読めばきつと、あなたも悲しいほど頭が澄んだ水のようになるでしょう。

ええ？ こんな大切なものをつて？ なに、私はもう要らないのです、こんなものに頼らなくとも、やっと、やっと、逢いたいひと邂逅たのですから」

「でもやつぱり、いやですね、大切………あら、なみだ」
「ええ、久潤」

罰利生によりて夫を殺い、財を窃られしは、怨むものなり。
 ?はひとを野壺へ抛り、?はひとの模糊を乾竹割に斫りぬ。

両肌をぬいで世話した親類がまた遅い、邇からぬ唯有る小路の湯屋がすかさず勤篤に通う、これこそ淤泥に輝く玉のごときものなれ。濡れぬうちこそ露をもで、怨むものの?れるは、血を吮う虫はすべて遁れんと、図れるにありけり。

ひとのために、酒を佐るに嫺いし手も、いつかはおのれの?むために、淋漓ながし、独法師を奇痒く、やなぎに受たる周囲の面々、おりおり、散りに散りぬ。

怨み、怨みと夜な夜な礫道をゆけば、晴らせし怨みの曩から、汲々と怨みがうつりぬ。

して見れば、あなたに咒殺させたるは、さしあたりて十指にあまりけり。

叨に?然と変死のいづるを、周囲は倦み困じつつ、ぼちぼちあやしき殃の渦中のものを、これ然にす。

地所家屋の売買の周旋と、貨殖のいつたんに、ひそかに高利の貸元を営みけるふたおやは、聒き衆の穿鑿に頬返しを付けかね、ことごとくわが杞憂の恥を、窓帷の引き切りたる十畳の間に寸隙もあらず裏みうつらせ、図圖につながせるがごとく幽閉せり。

かようなりては、みずからの儂き身のうえを慨き、胸はいよいよ痛み、目は見ぐるしく腫起りて、きようはきのうより瘦衰えるに、なぜおのれのみが羈に?りてかを怨み、また、怨みてときはりを打つらんよう、世を怨むにいたり。

父を怨み、母を怨み、夫を怨み、鄰人を怨み、怨みあきたらんと怨みをも怨むるに、百度千度、くりかえずに旦暮、おろかなる精衛の来りて大海をうめんとするやと、かえりて、頑にみずから守らんとすなり。

薄月夜、半輪の残月を懸けたるころ、寝耳に遐山の谷ることく、槁
れ声の洩えに、うちまじりける。

『久しく会わぬうちに、見るも愍なすがたになりはてたな』

夢寐よりさめしは、？をすりて、なみだ微紅めたる目をば、ただ、
坦なる天井にそそぎたり。

『さしものひよっこも、鋏桿の折れるほどに、すっかり怨み憊れた
かの』

「なにを申しましょう。百合の根をはがすように、ひとつひとつ、
渾ての怨みをば晴らさねば、枯木に花の咲くような心もちは音ずれ
ませぬ」

『そして、生みの親をも七生まで怨もうか』

いよいよ、怨み鉾をあらわし、むね裂くるていでありしも、蓐に
ぬかづけば、

「お坊さま、お坊さま、お願いでございます。私を繙にかけし大騙
を塵にして下さいまし。

それが、お坊さまのおつしやるとおり、私の父、母でも構いませ
ぬ。だれもが物怪の？いたように、まあ、たちまち爪牙をあらわ
して、樹を鳴らし、屋を撼かし、砂を捲き、つぶてを抛うして、令
見にするのでございます。

ですから、いっこくも蚤く、この恨さきものどもを卻て下さいま
し」

『ひよっこよ。きさまは、それで良いのだな？』

「もちろんでございます。

そうして頂けなくば、梅の咲き誇れるを俟たずして、ふたおやに
鳩毒をなめさせられるか、このうえ、肉という肉は落ち、骨という
骨は露われ、餓死するばかりにございます」

夜の闇く静なるに、燈の光のひとり刷毛にはかれるごとく、枕上
に浮びて、また、怨むものをうち目戕れり。

『すまぬの。じつはもう、ひよっこの怨みを晴らすことが、叶わぬ』
「なぜにございますか。これまでだって、さんざ、私奴のお晴ら

しくだすつたのでございましょう。これで了いにございます。どうぞ、どうぞ」

やよいの晦日つごもひなれば、京の花ざかりは、みな過ぎにけり。

戸外は天を傾け、まっ白に驀然とつぜんと雨滝ありし、ほどなく、神鳴も急にすさまじく、たえず稻妻の梭おきのごとく飛びちがいぬ。

「どつしたことでしょう。柱なぞはひちひちと鳴揺なりゆるがれ、ものうちたおす犇ひこぎ、ひきちぎる音、圧折おしへるはここ、かしこに。まさか。そんな。お坊さま、このあわれきわまる私奴を。いやでございますよ。お坊さま、なぜぶつくり黙つておられるのでございますか。さては、お心算こころしがございましょうか」

真紅の爪をひらめかせたる、黒竜のどこからとなくいずるかと思えば、その十丈あまりのを、一文字に、瘡やせ枯れたる頭をめぐけたり。

「勤あまちがいしてくるな。きさまにいたっては、せんじつ殺した達だ磨茶屋あまの怨うらみを買つたのだ。

十遍もの怨うらみを晴らしたのと齊ひとしく、十遍もの怨うらみをいまに晴らされるのだ」

「いやでございますよ。しししし、死にたくないのでございます。死んでも、死に切れるものではないのでございますよ。お坊さま、呶あめ、お見のがし下さいまし。なんでも、なんでも、そらこのとおり致しますから」

むねに烙やま、絶痛絶苦のさけびも空しく、みずからくずおれるがごとく直呻ひたしめきにぞ、ついに息も絶え絶えに休たおれり。

古書 四

漆の底ぶかい黝に、？々と吹き荒み、かぜ氷らしむる凍えありけり。

かの半襟に韜まれたるむなもと、はげしさに、あおのけざまに僵れる自らを、衿かき合わせ、異くうち目成れり。

山あつく畳み、嵐気ひやかに壑ふかく、いよいよ陥りて、いくめぐりせる葛折の、闇穴道という道、地獄の？にありけり。

ほのぐらき道をときに？い、ときに箭飛を作して、ちからなき木の葉の抜けるともなく、重巒の峠をのぼりたれば、ふかく蔽える岸樹の？、森羅殿の額かかれりうえに、いでける。

されば本堂へ通ずる塗柱、黒びかる廊下、哈々と笑えりいく鬼の牛頭馬頭の、ほどなく、あな呆面の目つかつたかとおぼしきに、獄卒たちの取囲に遭えるを、頭陀袋を抛られるがごとく、はてしなき階のまえにひきすえ、いでぬる。

「あれ、そんなにしくなくツても、エ、ひどいじゃありませんか」

きざはしのはるかてつぺん、まっ黒な袍に金の冠をいただける、

これまた異形の屏風巖と変わるところなきに、厳しくそこかしこをば、大睨ににらみける。

こなたにて、兼てよりうわさに聞き、かの閻魔大王なり。

ひとり泥にまみれ、泣音もなきに、くたくたと顔をあげたり。

「こら。その方はどんな悪事を勞いた」

閻魔大王の雷のごときは、ごろごろ響くにまかせ、罪人とやぶにらみに瞰下さんとすなり。

「こら。こたえろ」

「はい、はいはい、私でございますか。私は、なにも悪事などはたらしません」

これを聞きしに、？顔の大王、壁際にひかえ、鼻の鉄環を鳴らしたる獄卒ら、ひとしく身を入れ、どつと笑いに笑いぬ。

「その方はここをどこだと思つた？ 正直に答えればよし、さもな
くば、ときを移さずして、見るも恐ろしい地獄の呵責にあわせてく
れるぞ」

「お俣ち下さいまし。」

ほんとうに、ほんとうに、悪事なぞ身に覚えがないのでございま
す。もしここが、ひよっとして屏風絵などにあるような、紅蓮大紅
蓮の地獄の大門だと致しますれば、これはまちがい、とんだ大まち
がいに相違ありません」

くちのなかで牙をなめずり、ほどなく、鬼どもの方へ向きつつ、
荒々しく吩咐たれば、赤鬼は一度にかしこまりて、奥より大慌てに
ぞ、大磐石ほどの皮あつき藏書をば、五鬼がかりにて運び来たる。

「どれ。つい嚮から、うるさい冥官たちが次の書を届けたから、こ
れで罪のあらましがわかる。 ふむふむ。なるほどね」

とて、顔中の鬚をてすさみ、

「こらその方。なにが悪事に身に覚えがないだ。おれさまを出し抜
いて、そっくり妄をつくなぞと、見あげた奴だ。おい金鼓に金鼓。
こやつにおれさまの恐ろしさを教えてやれ」

吹来り、吹さる風は、大浪のよせ返しがごとく、たえまなく轟き
て、はげしきは、御殿の瑩柱をひちひちと鳴揺がす。

金鼓と金鼓の鋼又より、髪をからまれたるは、正に火炎をふき巻
かす焦熱地獄へほうられ、艶に胖なるに、？の撈りにあえるを、風
と、烟と、？との相雜り、相争い、相勢いて、顔のそこかしこをば、
じゅうじゅうと生燬に燬かれたり。

くるしみは、蜘蛛より手足を縮め、白眼をむき出したれど、また
もとの階に、打ち捨てられけり。

「どうだ。思い知ツたか。もういちど焦熱に燬かれたくなくば、正
直に躬らの罪を認めて、本式に地獄の呵責をささがるがいい」

とて、把持し鐵の笏、じゃんじゃんうち鳴し、かつ王の樂むに
似たり。

これを頂に、熱灰より、一体のしかばねの、なかば焦爛れるに見

出されぬ。

「こら。応える」

「私は……私の……私怨しえんによって、人を殺ころしました。ございます。むなしき燼余じんよ、声を斂おさめつつ、いよいよ、肝こたに徹とるなりき。

「よろしい。一めからそう白状はくじょうさえすれば、あのように徒爾むたにくるしまずに済すんだものを。のう金鼓こんこ、金鼓こんこ。

では、その方はみずからの？あせりを罪つみとして認め、この手証てしやうの八寸角はつすんかくのうちに、朱墨しゆもくにて署名しやうめいしてから、熊鷹くまだかの鳥とりかこのもとを絶壁てつぺきにそつて、はじめに出会いす獄卒ごくそつより三本の藤蔓ふじづるをもらえ。

いまは師しが許おほ多くてな、あとが問つかえるから、そうぼんやりもして呉くれるな」

鬼おにどもの、燼もえを攫さらさんと躡にじり倚よりければ、？のめりしままに起きも得えず、身を竦すくめてうめきながら、

「閻魔えんまさま。どうかお愠いりにならずにお聞き下さいまし。私は慥たしかに私怨しえんのために人を殺ころしました。ございます。

けれども、それが？のめりだとは到底たいてい思おもえないのでございます。なぜならば、私はかの男おとこによつて、一いちに悪事あくじを勞らうかれています。ございますから、私はただその讎かたきをば取とつたに過ぎないのでございます。？のめりです。ですから、閻魔えんまさまがおつしやる通りに、すっかり手証てしやうに署名しやうめいできないのでございます」

これを聞きしに、顔中かほぢうの鬚ひげという鬚ひげを劔けんと逆立さかて、百雷ひやくらい一所いしょに墮おちたるように号なげびて、

「なんだときさまッ！ 悪事あくじを勞らういた罪人つみびとが、そのみずからの？のめりを認めぬとは何事なにことかッ！

人間にんげんを殺ころめておいて、そのぶんには涼すずしい目をしおつて、おとおお、おれさまも数々かずかずの悪党あくどうどもを裁さいいては見たが、きさまのような不心得ふこころ者は見たことがないッ！

？のめり愠いりの落おまらぬは、最果さいくわての金牛宮きんぎゆうにまで届とかんとすものなり。

急あわてた鬼おにの腕かひな、電光でんくわのごとく躍なりて、黒髪くろかみを諸もろ？のめみにぞ、無む図ずと

りたり。

「こら女妖ッ。きさまの五体が千離千離にならぬうちに、丁と手証に署名をするのだ！　どうか、するかッ！、せぬかッ！」

鬼は逸れど、焦れど、寸分の微揺もえず、せめてはと、泣音を立てさせんとせば、ちからはいまも絶々に、血声をあげ、身を剝らんとす。

「私が一に悪事を受けなくば、私が一に讎なぞ取りは致しませぬ。事ののりーにこそ、大罪はあるのではございませぬか」

大王の太短なる眉を打顰るに、

「では、きさまの曰う通りだとすると、悪事を勞かれたものはみな、人歿を許されることとなるが、きさまはそれでも構わぬと申すか？」

「構いませぬ」

「金鼓ッ、金鼓ッ！　この極悪の罪人に鋼又を呉れてやれいッ！」

風は猶も邪に吹募りて、いつそ凝れる寒、生気をば吸い尽したれど、さらぬだに、陰森たる夜色は、ますます冥く、ますますさまじからんとす。

金鼓と金鼓の鋼又にかられりは、くらやみに瑩めく剣山刀樹へうちひかれ、串刺されたるや、殪る？なきに、手矛にて、かわるがわる、血の叫びをあげにあげたり。

気の喪なえることなく、まして、生命竭きて死ぬること容されず、日々夜々、百の歳月、蒸羊羹のごとく刻々に、劈かれり。

百年を経た森羅殿のきざしは、僵されたれば、汚穢く黒ぐると、引韜まれり、正く浮木芥の類とも見えざるものなり。

「ほう。これはまた寿をちぢめて帰ったな。

きさまが百年も克わぬ依怙地を張って、塵葉いっぽん饋えぬなか、四兆八億もの罪人が、みずからの罪を大筋に認め、この八寸角のうちへ柳条をなすほど署名して往った。

やいきさま。とうとう刃の苦楚に土性骨をうちくだかれて、おのれのくだらん地動波動を刪正に参ったか」

忍びてはみずからを矚りつつ、便無げに佇みけるに、泣音のほと

ばしらんとするを、こえおごそか 声粛に、

「くろ 審しくて

くろ 審しくて

かんが 思える？いとま もごぞいませぬ。

どうか

どうか楽にして下さいまし」

いみじ 妙くも為たりとや、

めさや 鬚面のふと目鞘の走りて、

おおやたて 大矢立の筆を抽き、

その三尺のものを額叩くさきに擲却りぬ。

かせ暴頻るどよみにまぎれ、地獄に落ちし血の叫喚の聞けぬ夜はなしに、劔の山、血の池、ほかに熱きは焦熱地獄の？の谷、寒きは極寒地獄の氷の海に至るまでと、呵責もまた、罪人によっていく通りとて、果てもあらざらんや。

まして怨むものの蝙蝠のごとく逆につられ、鉄の筈に卍に裂きに裂かれり。

百月百年をば、磨鉢を啣み、いっばいの喉をかき筆りつつ、号びてのけぞり、はうこともこれ克わん。

死灰のごとく丈の黒髪、？のうちになびかせ、白きうなじをば骨抜きに落しながら、もだえ苦しむ姿、そのうえ、刀樹のこずえに五体つらぬかれたる累々の亡者と、変るところ是なしに。

骨皮の舍利になるうかと、？日かせ恬に草かおりて、ほどなく山？の長壁を渡りぬふた影、雲間から雲間に伝うるに、乾竹割に割放したる絶壁より、見へ隠れせり。

ひと影、眉間に白毫、青紺色の目を瞑りてきたる釋迦如来。

またひと影、蹠を慕い合掌したる沙金の天衣姿。

まことや、三界六道の教主、十方最勝、光明無礙、億々衆生平等引導の能化にあられり。

釋迦如来のおもむくところ、獰猛なる獄卒とて、臣下のごとく禮拜せり。

血のあめ降りそそぎぬ、地獄の奥底にありしも、後光の煌、金色の地に立てるかと思しきに、ふた影の行路、安庠とイめり。

「お釋迦さま？ ここはまあいつたい、なんと申しましょう」

阿鼻叫喚の地獄のありさまにて、たえがたく声も立ちぬべきに、はじめて人目あるを睨りて失したり思いたれど、所為なくはごろもを緊く目に掩てたり。

「爰は六道の最下位、かの有名な地獄の底なのですよ。」

いくら世間知らずのあなたでも、いちどは耳にしたことがありますよ」

「あの、八熱地獄やら、八寒地獄やらと申します、大和絵に見る恐ろしいやつ……場にございますか」

「如何にもそうですね。死者の生前の罪が審判されて、各々に見合った呵責を受ける場なのです。」

いま、あなたのお兄さんが行きがちから落ちそこなっている奈落というのが、このことなのです」

「まあたいへんッ！　いくら気丈夫の強情の兄さまだって、このよ
うな際限のない窘しみのなかへ落ちてしまつたら、それこそ根もな
い話になつてしまいます」

「ですから、こうしてわたしから直々に閻魔大王へ久濶をわびて、
罰利生の半生の五戒十善を篤と説いて、あなたがた兄妹が永久に離
ればなれにならないようにと　　。

まあ、見ていなさい。なににせよ、罰利生の善行の数々といつた
ら、沙金の成仏を境におびただしいばかりなのですから、さしもの
厳しい閻魔大王も、いまに恐れ入つてしまいましたよ」

そのゆび織長にして、爪は赤銅のごとく、掌の蓮華に似たるを、
恐れるな、とて掩わん。

とある人皮はぎし大板敷、ふた方の通り掛けりおり、山と積み
たる肉塊、はすっかけに崩れたるうちより、千曳の磐石になかばつ
ぶされ、身をばちりぢりに這うが一体、殆く天衣を束まらんとせり
に、ふみ近らし、尻居に倒れり。

「まあひどいッ！　　いったいどうすればこのような注連縄のような
身体になつてしまうのかしら。それにあなた女性のようでもあるし、
私とちつともかわらない歳じゃないの。」

あら。あら。窘しいのかしら。なにかおっしやりたいようだけれ
ども、そんなに血を吐き出してしまつては、ごろごろいうばかり
で、畜生の……私にはよくわからないわ」

なんたる因果、這いよりし罪人の、怨むものに異ざれば、ひとこ

と「拯^{たす}けて」と直^{ひた}呻^{うめ}きにぞ呻^{うめ}きたる。

これを窃^そと聞きしは、可^あ憫^{われ}さに居^{いた}久^{たま}らぬまでに、まどえるなり。
「さあ。もうその辺でお舎^よしなさい。

罪人の許^あ多^おはそうなのですよ。業火の寤^あしみのうちで、自らの生前の罪をつぐなうのです。ですから、巫^ふ山^{ざん}戯^げはんぶん^に罪人の声なぞに耳を貸してはならないのです。

また、串^じ戯^{うた}にも愍^あ心^わを出して、すがり来る罪人を豈^まかたすけようとしても、決して万^ま般^{ぱん}のためにはなりません。では、参^まりまじょう

魚^に膠^くなくくらやみに消えたるに会い、うしる髪^{かみ}ひかれし想^{おも}、見^みしも、阿^あ容^{よう}天^{てん}衣^いへ顔^{かほ}を掩^{おほ}わんと、葉^は越^えのあなたへ躡^ふみ入りぬ。

さすればいずこから鋼^さ又^{また}のふり来^きり、やにはに立^たち竦^{すく}みて、声^{こゑ}を揚^あげたる喉^{のど}を啖^く裂^いかんと、人^ひ皮^{かわ}剥^はの大^お板^{いた}敷^きへ逐^おい返^{かえ}えさんとすなり。

地^じ獄^{ごく}とは、一^い三^{さん}六^{ろく}の責^せ苦^{めく}ありて、劔^{けん}に臟^{ぞう}を貫^くかれる、？に顔^{かほ}を焼^やかれる、舌^{しほ}を吃^えと抜^ぬかれる、生^{せい}皮^{かわ}をさかしまにむしられる、鐵^{てつ}のきねに撞^つかれる、油^{あぶら}の鍋^{なべ}に煮^にられる、毒^{どく}蛇^{へび}に腦^{のう}味^み噌^{そう}を吸^すわれる、熊^{くま}鷹^{たか}に黒^{くろ}目^めを啄^つかれる、などなど、艱^い苦^くのいちいち数^{かず}え立てははてしなきに、寤^あきながら悪^{あく}夢^むの覚^さめやらぬが地^お獄^{ごく}とも、途^と方^{ほう}に昏^これたるおりしも、われを忘れ、つとほとばしる哭^なき声^{こゑ}、咬^か緊^みむる齒^はをさえ漏^もれつ、いずるを、蚕^{かい}の糸^{いと}を吐^つきて倦^うまざらんごとくに、限^{かぎ}りも知らず、長^{なが}きに亘^{わた}りぬ。

ほどなく、么^か微^{すか}なる寢^ね息^{いき}を立てつ、うちしおれ、短^{みじ}きゆめを結びけり。

古畫 六

左往右返、暗中もさくしたる心地にて、目をば覺ましたれば、密樹に声々の鳥呼び、目には幽草歩々の花を發きぬ。

さてとや、あれほど火と烟とが逆巻くうちを、大風にふき散らされる落葉のごとく、粉ごなと四方八方へ逃迷える夥しきは、どこへや行かんや。

ただ、はるか木隠の音のみ、聞こえし流れの水上は、浅く露われるなり。

怪しむべき哉、地獄に仆れるべきを、万斛の珠、鳴せり谷間の清韻を、樂むる身のうえに目付けたり。

「おめざめですか。あなたは　まあ、よく魔れていたものですよ」

いつ歩めりものか、惴々と？せりうちに、二千本の梅の梢の、ところどころ見あぐる釋迦如来、つきなく倚らんとす。

「御容赦下さいましッ！　ああ、御容赦下さいましッ！」
青紺色の睛に、細眼に？えし、また、静かに微笑せり。

「いいえ。私は沙門ですから、ご安心なさい。

そうして、ここは極樂の梅林園。なにもそう胸さきに刃のとおりような顔をしなくとも、ここ極樂浄土には磨鉢いっばん落ちていませんよ」

如来の蹤に歩みければ、路を埋むる幾斗の清香、凝りて掬ぶにたえたり。

ところどころの乱石、低く横わるのみにて、地は坦に氈を鋪きたるに、芝生の園。そよとの風もあらぬに、花はしきりに散りぬ。

散るとて、かろく舞うを、鶯は争いて歌えり。

すでに如此くなれば、怪はいよいよ怪に、あるいはゆめに見たりしあとの、なお、着々と活現しきたりて、あくまで我を脅さざれば休まざらんと、するにあらずや、と胸安からずも足に信せり。

「あら。あすこの茂みに草枕するのは、罰利生ですよ。

ああして、一日中、まあちよつとも動かないのです。あなたは罰利生をご存知ですか」

おのれの顔のしきりに眺められるをまばゆがりて、また、ためらいぬ。

「あの男は、あれで、もとは悪木の蔭にいる爛死蛇でしたけれども、とある疼痛を負ったことから、以後まったく非を悔めて、まあ私の目からも差し含れる涙を誘うに足る、無尽の五戒十善を遂げたのです」

五六歩すすみゆきしおもて、また唇をかみぬ。

「罰利生のことは、この私奴にも、どこか遠くの果てに、また漠然とのみ込める気が致しますが、いよいよ首肯らないことといえ、この身の上にございます。

盆は破れて、水は覆っておりまますものを、なぜ地獄におらず、かくのごとく極楽なぞへゆるされているのでございましょう?」

鶯の声のたえま、流れの音はむせびてやまず、後光に目のくらむる肩頭に、ちり来る葩を拾いて、おのれの唇に代え、連にかみ砕きぬ。

古書 七

遲疑たゆたきこと薄氷はくひょうをふむ想い、いく日も極楽の野もてなに？待まちされり。

地獄の鋼かみ又より髪をからまれ、手矛てぼうにてかわるがわる打刺ぶっさされり日々、思えばこそ、上かみは月卿雲客げつけいうんかくから、下しもは乞食非人こしきひにんまで、息も切れ切れにて、逃げまどうを思えばこそ、實まの身、白馬ばくまは馬にあらずや、とみずからを賤奴せんどに思えりも、ふと咳入りせきいり万口ばんこうの喀血かっけつ、斑爛はんらんと委おとせし日のあらざる平安の浄土じやうとに、そと襦袢じゆばんの袖をまぶたにすりぬ。

「うづうづ。とても番狂ばんわくなことに、ここち枯木こくに花の咲くようなもの。

だれに問いましたりも、永久にゆるされない罪人と口を揃えますものを、お釋迦しやさま。なぜでございましょう。なぜ私は極樂にて助けられたのでございましょうか？」

身をも搾しぼられるばかり、泳うえかねたる万謝ばんせの涙をいだせり。

「確かに、あなたの犯した罪は、いまも地獄の底にて償いつづけなければならぬものにちがいありません」

「ですから なぜッ！」

質疑を幾千にわたりて漆膠しつかくく受けたるに、絮くしと聞き捨てしこともあらざれば、されど、真意まいたくしを秘隠ひかくに隠しぬ。

「どうか、それだけは教えて下さいまし」

「それを知って、あなたはどうなさいますか」

「どうって！ 感謝を致したいのでございます。」

万いとお一、どなたかの御情おんなさけの恩恤おんけであるならば、最いとお愼しんしきかの御方へ、ああ、渾身の御禮おれいを………」

なみだぐみつつ焦心せうしんになれるを見るに、金身こんしんの鮮麗せんれいにて、雍しとやかかに小腰を屈め、

「その御方は、あなたの御禮をみずから望まれていません。さあ。早くお還りなさい」

「いいえ。それでは私の気が晴れません。どうとなり、その恩人へ一目でも会わせて下さいまし」

「ことばは決してうちに躬らあざむき、またあえて外に他を欺くにはあらざりき。」

声は静なる陰森凄幽の百合林を動し、響きぬ。

「あなたは眩暈そのもののような強情なひとですね。」

その点でいえば、あの人もたいへん御気の強く、二念なく信念を貫く御方でした。

そうですね。私もあのひとのいまが杞憂になって来たところですから、まあそんなに逢いたければ、私のあとになって、木のもとをおいでなさい」

手をつかね、秋蛇のゆくに似たる逕に入りたれば、それを見し、駈けより、竹の清韻を聞きて、岸の柳をくぐり、とある蓮池のふち、葉越より白きおもてを露わしぬ。

いちめん蓮のうちにて、つと隠れる小腰を屈めつつ、池いっぱい咲き乱れたる玉のごとき真白な花の、金色の蕊より、たえまなくあふれ出たりし匂い、香がんとせるに逢いにけり。

「さあ。こちらへお回りなさい。そうです。そうして水のおもてを蔽っている蓮の葉の間から、水晶のような水底を透き通して、いったいなに見えますか？

まあ。びっくりしたようですね。無理もありません。そうです。

この極楽の蓮池の下は、ちょうど地獄の底にあたっています。

ですから、ここから三途の川や針の山の景色が、あたかも物見遊山でもするように楽らく見渡せるのです。

どうですか。私はあなたのくるがねの筈にうち込まれる姿も、あるいはちびきの磐石につぶされる姿も、あるいは毒竜のあぎとに噛まれる姿も、ここからこうして、のぞかない日は一日もなかったのですよ。

さあ、ご覧なさい。今はなにが見えますか？ 粉々然と四方八方へ逃げまどう罪人が見えると、あなたはそう思いましたね。いいえ。

もつとよくご覧なさい。さあさあ、もつとです。

束帯そくたいのいかめしい殿上人てんじょうびとや、五つぎぬのなまめかしい青女房あおにようぼうや、じゆずをかけた念仏僧ねんぶつぞうや、高足駄たかあしだをはいた侍学生侍学生や、細長ほそながを着た女の童わらわや、みてぐらをかざした陰陽師おんやうしや、あらゆる身分身分の人間人間が十王をはじめ、おそろしい眷属けんぞくらからのがれようと上うへになったり、下したになったり、ほかの罪人ざいじんたちといつしよに蠢うごいている人堵ひとがきのうちで、だれ一人でもじつと合掌ごうしやうして猛火みょうかに叫なばないものはありますか？
そうです。とうとう見つけたようですね。

牛頭馬頭ごうとうばとうの獄卒ごくそにさいなまれて、その手矛てぼうに脇腹わきはらを刺し通とおされても、くちびるをきびしく咬かみしめて、じいつと耐え忍しのんでいる娘むすめがありました。

あの娘むすめこそあなたを百ひゃくの呵責かさく、千せんの苦艱くげんより救すくった沙金さごんという娘むすめなのです。

あなたは覚おぼえていますか？ 私わたしと沙金さごんとが地獄じごくへ落ちかけた罰利生ばつりせいを救すくいに、ここから遙々えんえん森羅殿しんらでんまで降りて行いったときの事を。

あなたは山やまを？くすしたような罪人ざいじんたちの堆うずたかいうちから、身をばちぎりながら内臥うちぶせに、拝ひみきたる沙金さごんのひざもとへすがり衝ついたのではありませんか。

あなたのすがり衝ついたさきがちがったならば、ちつとも心をくだかずに、私は裾すその縲ほつれを引き直すくらいに澄すましていました。それがあの沙金さごんと来たら、まあどこまでも気のやさしい娘むすめですから、私わたしといつしよに兄あにを救すくって戻かえって見たところ、おもてむきは兄あにの罰利生ばつりせいと一大快事いちだくさいとばかりに喜び合あっていましたけれど、まあ、私の顔かほを見つけさえすれば、やにはに差し含こめる涙なみだをこゆびの端はしに払い、『あの人ひとをどうぞ救すくってあげて下さい』と、決きまって吭のどをつまらせるのです。

私わたしが何かなにいうを待まちたずに、『四王天しやうおうてん、？利天りてん、夜摩天やまてん、兜率天とすつてん、樂變化天らくへんぎやうてん、他化自在天たけじざいてんと、これから六天りくてんへ参まゐる私わたしが、罪人ざいじんひとり助けられないで、いつたいなんの天女てんじよでしょう。

あのひとが私にすぎり、救いを？めたのもなにかの因果にちがいませんから、ぜひともあのひとを救って下さい』と、また玉の発矢と割れるようにいいます。

私はけれども罪人の罪はいいかげんには取り消せませんから、あなたがあのひとの身に地獄へ向わなければ、どうにもならないのだという、さすがの気のやさしい沙金もこれにはたいへん堪えたと見えて、いく日もなみだ微紅めたまぶたをつつんで、露のあしたの草のように悩める姿が、いつまでも見られるようになりました。

けれども、それから一百八日が過ぎた日のこと、ちょうど私が祇園精舎へ参ったところを、竹や芭蕉のなかの道から、沙金のひとり歩いて来るのに邂逅しました。

沙金は静かに合掌して私を見上げますと、しめやかに石走る水の響のうちで、『私はこれより地獄へ参りますから、お約束どおり、どうかあのひとを救ってあげて下さい』と、ついにいったのです。

私は沙金の見どころのあることを、常々ほかの佛弟子たちに、佛法の貴賤をわかたぬのは、たとえば猛火の大小好悪を焼きつくしてしまうのと変りはない、と經文に書いて辯ずるほどでしたから、沙金の失えるをじつにもつたいないことだといって、玉の碎けて迸しり、練の裂けてひるがえるような早瀬の流れを見つめながら、二人きりですいぶんおおくを語り合いましたが、そこは罰利生の妹に生れているだけあって、筋金入りの強情には変りありません。

とうとう地獄の底よりあなたを救いますと、ああやってほかの罪人らといっしょに血の池の血にむせびながら、いまにも罪人のため息がこだましそうな針の山へとおい上げられているのです。

それはあなたが身をもって虐まれた紅蓮大紅蓮の地獄の呵責ですから、私になにもいまさら語る必要もありませんけれど、卍にさかまく火炎は剣山刀樹をも爛れるかと思うほどの業火にちがいありませんし、髪は枯草のようにやすやすと燃え、生爪はくさい蒸気を揚げてとろとろと溶け、あなたはよく文目もわかず、乱れて、顔を生燬にされて血声を揚げていましたでしょう。

たまに闇からぼんやりと浮き上がるものがあるかと思えば、それは恐ろしい針の山、まるで妖星の光りのように瞬いて、その針山に一度でも放られれば、身の丈ほどの磨鍼の海が十一里にわたって五体をつらぬくに決まっていますし、足の裏はもちろんのこと、髓を刺し骨をえぐり、針の届かないところは髪の毛いっぽんなく、あなたは蜘蛛より手足を縮めて、ひざ先からべったりと坐った少女のように泣いていたものでしょう」

「ああッ！ やめさせて下さいまし！ あの御方にはなんの罪もございません！」

よろめき蓮池のふちをいでたりしが、ちからや余りけん、からだを支えかね、？と石幽いしゆうにあたりぬ。

「いいえ。沙金はあなたの罪を背負ったあの日から、もはやほかの罪人たちと変わりありません。ですから、私は鬼になった意衷いそうでちつとも容赦はしません」

「それがまつたくの誤解にございます。いいえ、誤解だなんて、そもそもこんな莫迦らしい話は聞いたこともございません」

「さあ。なんの話でしょう」

無慙むざんにくちびるを咬みて、おさえ難くもいよいよ激せるなり。

「かの御方は、何もかも存じていらつしやらないのでございます。

私を　私をどこの馬の骨とも存ぜずに、垠はてしなき艱苦を、事もあろうに私の身に虐まれておられるのでございます。こんな莫迦な話が六道のどこにありましようか。まさか知らず知らずが……このような皮肉を……。

じつは……じつは……あの沙金を咒のろい殺ころしたのは、まつたくこの私奴に相違ありません」

人心地をも失わんとし、身のおきどころなくうち竦みたりしが、ほどなく、ふと微笑をたたえつつ、静かに見下ろせるに会いぬ。

「知っていたら、どうだというのですか。知っていたら、沙金はあなたを見捨てて胸を刮かくこともありませんでしたか？

いいえ。私が『罪人を助けるには沙金が身代になるしかない』と障さまた

碍たとき、あなたの罪を　あなたが罰利生を怨む余りにその妹であるあなたを咒い歿した女だということをし、惺然と口に出して伝えました。そうして、沙金は一百八日の懊惱ののちに、睨と顔を抗げますと、

春雨に

いたくなふりそ櫻花

いまだ見なくに

散らまく惜しも

とそらに歌って私に合掌したのです」

倏忽に瞳をこらせるに、如来の顔を熟視してやまざりしが、やがて?のうちに浮びて、輝くと見れば、霑いていずるものあり。

「やめさせて下さいまし、やめさせて下さいまし。まったく私が悪いのでございます。貴いかの御方にくらべましたら、私は蟻とも蠅とも糞中のうじともいいようのない人非人にございます。ただちに地獄へ参りますから、いちはやく、沙金さまを極楽へお戻しになつて下さいまし」

おちこちの打披ける蓮、葩は凜として玉のさいたるごとく、濃香芬々とほとばしり、葉色に露気、いよいよ、緑あざやかに打戦ぎぬ。「それはもう、どうにも仕方がないのですよ。こうなつては閻魔大王ですら、所為なく鬚を撫でるのみ。ただ、沙金があなたの身代に罪を償うのです」

「やめさせて下さいまし」

すがり来たるを?えし、青紺色の目、睨りてじつと思入り、「それではあなた、躬らの罪をこころより、すっかり後悔したのですか?」

「はい。ふかく後悔しております。これでは後悔どころの動亂にございませぬ。」

それは私じしんが、余念なく怨しいばかりにございます」

とて、競々うちふるいて働き、ふかく悔悟のひらえかねたる罪、

いだせり。その銀の耀き、斑爛と地に委ちたれば、？々水を引きし
泉水のごとく、ふみどころ是なく、地を這いでけり。一より、猪
口にあふれる水の玉、たちまちに、？鞆と瀉ぐ早瀬の流れと成りて、
駭く浪の体を尽し、乱れる流れの文をまきて、みまわす蓮池、幾個
の怪き大石、かの鰲背を聚めて丘のごとく、そのいきおいをふせが
んと為れど、さわるれば払い、あたれば翻り、長波の邁くところ滔
？と、破らざる為き奮迅のちから、極楽も為に震い、地獄も為に轟
き、身毛も弥堅ちて、すがれる枝を放したれば、すでにうずまく滝
津瀬に生憎！桜はちりかかるを、とつさの遅れを天にさけび、地
になげき、流にもだえ、みずくず、浮木あくたのたぐいとともに、
波間隠におし流されり。岌々たるその勢、ほとんど連瞳く目もとま
らず、漾うる水の文、透とおる底の岩すらも、水石の？々たる弄び
に、なにも残らぬ快さ、ありけり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4791o/>

しばらく

2010年12月18日21時39分発行